背

313
455

特235
144

小さい國文學史

文學士
植松安著

東京
廣文堂書店

昭和二 帝國圖書館 五二

はしがきの一

此の間電車のなかで若い婦人の話を聽くともなく聽いて居ると

あの人の顔は隨分映えない顔ですね

えゝ羽織もかなり時代ものね

などゝいふ會話が耳に入つた。驚いた。けれども自分達友人同志が集つても、談話は大概下らない事ばかり。考へてみると、人の噂が多い樣です。私の所にたまに女客があつても、話題がすぐ盡きてしまつて、相手も此方も困つてしまふ事がある。從來の道德は喋る事を惡いと敎へました。「ものいへば唇寒し秋の風。」默つて居る方が安全であり、無益な多辯は身をあやまる事もありませう。然し話の材料を多く持つ事は、決して不幸ではない。

話題といふとなんでもない事のやうですが、さて考へてみれば、やはり修養が無け

れば、相當な話の受答は出來ません。修養はなんでもかまはない。趣味は如何なる方面のものでもよい。高尚なものを一つねらつて、それに近づかんとすれば、自然に養はるゝものであります。實務上の話は萬人向きでなく、藝術上の話は誰にでも通用します。美術・文學、なんでもよいから、一つぐらゐは心掛けて居る方がよくはありませんか。これは話題の上からばかりではありませんが、特に着物を品評したり、顏のおつくりを上下する一部の風習は、まことに見つともないものです。

私はこの醜さを幾分でも除き得るかと思うて、日本文學とはどんなものか、どんな徑路をとつて、發達して來たものかを、極く平易に、極く入り易く書いた積であります。文明は、汽車や電車がいくら發達したからとて、圓滿な發達をするものではありません。人間が出來なくては駄目です。日本がたつた五六十年で、教養ある國民を得ようと云ふのは無理な話でありますが、それを得んとするの心掛は常に持つて居らねばなりますまい。學校を卒業すれば、それでおしまひの教育修養は惜しい事です。

折角字が讀めるやうになつた少年少女を、あとの事は知りませんと手放してしまふのは罪です。大にしては國家の損失です。

出でて働く夫が、修養の暇の無い世の中。內に働く主婦が、讀書などの暇がない忙しい今日。仕方がないと云へば、それ迄ですが、家庭の讀物に適當した書物が少いといふのも、否まれません。私はその一面――この頃の詞でいふと、成人教育――の爲にも、此の本を書いてみました。

植松生

はしがきの二

一、かぎられた紙數に、限られた時間を以て、國文學史を纏めるのは、甚だ難事でありました。思ふにまかせぬ節も多々ありますが、他日の訂正を豫期して、今日この原稿を書肆にわたします。

二、この小さい國文學史を草するに當つて、芳賀矢一先生、故藤岡作太郎先生、そのほか先輩同學の方々の著述に學んだ所が、尠くありません。こゝに記して厚く御禮を申述べます。

三、多忙な公務の餘暇、思を凝らす時もなく、平素の考を書きなぐつた、これが、印刷になると思ふと、穴にも入りたい氣がしますが、扨幾分の努力を拂つた跡を眺めては、また愛惜の感があります。

四、この書物は大正十二年九月一日の震火災で紙型から當時の在庫品全部やられてしまひました。再版にあたつて多少取捨した所があります。

改訂版について

一、どうも横組は面白くないといふ事になつて、今度は竪組になりました。

二、家庭の讀物にと思うて書いたこの書が學校でも用ゐるといふので、その爲に改訂をした所が多くあります。

三、然し、もと〳〵日本文學の大體を知らせようとするのが目的ですから、詳しいものでない事はお斷して置く。

四、教科書にお用ゐの方は、これを骨子にして必要な所を敷衍していたゞきたい。また家庭の讀物となさる方は、足りない所は、他にいくらも詳しい適當なものがありますから、それらに進まれたい

大正十五年初冬

小さい國文學史　目次

第一章　總論……一
一、文學と文學史……一
二、我が國の文學史……六
三、國文學の種類……一二
第二章　奈良朝以前……一八
一、時代の概觀……一八
二、神代文字……二〇
三、漢字の傳來……二二
四、我が國の文字……二二

五、歌謠……二五
六、祝詞―壽詞……三二
第三章　奈良朝時代……三八
一、時代の概觀……三八
二、固有の文學……四〇
三、歌謠……四五
四、萬葉集……四六
挿畫　元暦校本萬葉集の一部（萬葉集諸本輯影卷上に據る）……四七
五、柿本人麿……四八
六、山上憶良……五四
七、山部赤人……五六
八、大伴家持……五八

九、其の他の歌人……六〇
十、散文……六六
十一、宣命……六七
十二、國史―古事記……六九
挿畫　大須本、古事記上卷の首（古典保存會發行に據る）……七一
十三、風土記……七五
十四、氏文……七八
挿畫　應神天皇紀の一部（日本書紀古本集影に據る）……七九
十五、當時の漢文……八〇
第四章　平安朝時代……八二
一、時代の概觀……八二
二、文事偏重と藤原氏……八四

三、貴族社會……八六
四、女流文學者……八七
五、平安朝の文學……八八
六、歌謠……九〇
七、古今集……九五
挿畫　紀貫之筆高野切（古今集）凸版刷……九六
八、在原業平……九八
九、紀貫之……一〇一
十、他の諸家……一〇三
十一、古今集以後……一〇七
十二、好忠—公任—俊賴—俊成……一一〇
十三、女流歌人—和泉式部……一一三
十四、西行法師……一一五
挿畫　西行物語（繪卷）の一部……一一七
十五、散文……一一八
十六、物語……一一九
十七、源氏物語……一二三
挿畫　石山寺に於て源氏物語起稿中の紫式部、四色版……一二四、一二五
十八、歌序……一二八
十九、日記—紀行……一二九
二十、隨草—枕草子……一三六
二十一、雜史……一四〇
第五章　鎌倉室町時代……一四六
一、時代の概觀……一四六

二、和歌……一五二
三、新古今集……一五四
四、定家—家隆……一五六
五、師範家……一五八
六、源實朝……一六〇
七、他の諸家……一六二
八、連歌……一六四
九、隨草……一六七
挿畫　大福光寺本方丈記（古典保存會刊行に依る）……一六九
挿畫　徒然草、壽儉院抄上卷本文首端（神宮文庫）……一七三
十、物語—お伽草子……一七六
十一、日記—紀行……一八〇

十二、戰記文……一八四
挿畫　河波文庫眞名本卷一卷頭（國語史料鎌倉時代之部平家物語につきての研究に據る）……一八九
十三、謠曲—狂言……一九五
挿畫　室町御所御能奥行之圖寫眞版……一九六、一九七
十四、雜史……二〇〇

第六章　德川時代……二〇三

一、時代の概觀……二〇三
二、漢學……二〇七
三、歌謠……二〇九
四、俳諧　發句……二一五
五、芭蕉……二一九

挿畫　松尾芭蕉（博文館、俳諧文庫芭蕉全集に據る）……二一九
六、その他の諸家……二二二
挿畫　蕉村の筆蹟……二二六
七、俳文―狂歌―狂句……二二七
八、淨瑠璃―脚本……二三二
九、近松門左衞門……二三六
挿畫　古淨瑠璃本（公平本）……二三八
十、散文―和漢混淆文……二四八
十一、貝原益軒―新井白石―室鳩巣……二四九
十二、國學の四大人……二五六
挿畫　本居宣長の絶筆……二六一
十三、古典の研究……二六三

十四、雅文……二六六
十五、小說……二六八
十六、井原西鶴……二七〇
挿畫　赤本（木版刷二葉）……二七〇、二七一
十七、山東京傳……二七四
挿畫　金々先生榮花夢表紙寫眞版……二七五
十八、瀧澤馬琴……二七七
挿畫　修紫田舍源氏寫眞版……二八一
十九、滑稽文……二八三
第七章　明治大正時代……二九〇
一、明治維新……二九〇
二、新文學……二九二

目次

挿畫「小說神髓」表紙寫眞版……二九三
三、和歌……二九五
挿畫　高崎正風短册寫眞版……二九六
四、俳句……二九九
挿畫　正岡子規短册寫眞版……三〇〇
五、新體詩……三〇一
六、劇文學……三〇四
七、小說……三〇八
挿畫「當世書生氣質」表紙寫眞版……三一一
挿畫「我樂多文庫」表紙寫眞版……三一三
挿畫　尾崎紅葉短册寫眞版……三一四

終

小さい國文學史

第一章　總論

一、文學と文學史

文學とは高尙な嗜好を基として、思想感情想像などを文字に叙べたものである。この、高尙な嗜好を基とするといふ事が、頗る大切な事で、如何なる文字・文章・歌謠もそれが悉く文學であるといふ譯ではない。卽ち此所に藝術的の價値といふ事が必要になる。そこで、藝術的の價値とは何ぞといふ問題になると、頗るむづかしいが、古來、偉大なる藝術は多數の人に最も永久的な悅樂を與ふるものである。

といふ詞があるから、先づこれを基礎として、文學を見てゆけば差支はあるまいと思ふ。これを他の一面から言ひ換へて見ると、「低級な文學は到底永い生命のないものである。」といふ事に歸する。然し、この藝術的價値といふものが、多數の人に認められたものばかりであるといふ事も、實は危險な事で、低級な人ばかりに認められたとしても、それは結局文學では無いから、文學を解する、文學を味はふといふ方面からは、これを讀み、これを了解して行く知識を養ふといふ事が、頗る大切になつて來る。卽ち高遠な藝術に近づかんとするには、夫れ相當な準備が必要であるといふ事になる。文學の鑑賞も、結局は興味そのものであるけれども、その興味は必ず修養を經た興味でなければならぬのは、誰も異論のない所であらう。

人生にとつて、藝術――文學――といふものが缺くべからざるものである事は、いふ迄もないが、その文學を味はふ爲には、先づ準備として文學を知らねばならぬ。その知る方法にもいろいろあらうが、一國の文學が古代から近代に、どんな具合に變遷し、發達し、增加して來たか、といふ事を見るのが大切である。

この、一國の文學が、どんなものであるかといふ問に對して、こんなものがあると答へるのが、とりも直さず、文學史の一面の任務である。けれども、文學史といふものは、こればかりのものではない。文學鑑賞の準備として、曩に述べた知識を養ふといふ以外に、更に人間の理想感情などが、どんな具合に變遷し、發達して來たかといふ事も窺ひ知ることが出來る。人々は個人個人にその各の思想感情を有して居る事は勿論で、譬へば小兒の時から、齡を終へるまでには、修養境遇などによつて、常に思想や感情が發達變遷するものである事は、誰も認める事であるが、その思想感情が、それならば或個人について、どんなに變つたか、どんなに發達したか――中には低下した場合もあらう――といふ事を具體的に知りたいと思ふ時には、何が材料になるであらうか。勿論その人の境遇、周圍といふものが、その個人の面影を傳へるけれども、なほ一層その人の眞面目――卽ち心の奥――を知りたいと思ふ時には、どうしてもそ

の人の文學が、その人自身を最も明白に語るものであるといふ事に、誰も異論はあるまい。

個人に就いては、上に述べたやうに、文學乃至藝術といふものが、その人の心の奥即ち最も意義ある人生を明白に語るものであるとすれば、これを個人の集團――國民――に引直して見ても、同じ事が云ひ得られるのは當然である。

一の國民には一の固有な思想感情が存するもので、その國民の文學は、最もよくその特質を發揮するものである。なほ小さく考へて見れば、一時代にはその時代の特長があり、個人（文學者）には個人の特長があるといふ事になるから、これを殘された文學によつて窺ひ知るといふ事は、最も當を得た方法となる。

或個人と個人との交際でも、「あの人はこんな事を云うたが、どうしてあんな事を云ふのだらう。」と不思議に思ふ場合がいくらもあらう。それは、その對者の思想や感情がわからない爲に起る不思議である。個人の場合には、比較的無難に事も濟まうが、これが國と國との間となるとなかなかむづかしい問題となる。例へば支那と日本、米國と日本、その他の國々と日本との關係、交際といふ事に、若し理解出來ない場合が起つたら、さう易々と事は片附かぬ。事件の經過を調査して見ても、最初から交換した文書を讀みなほして見ても、雙方が理解出來ぬ事は、曩の個人の場合と同樣になる。それは多く對手の國民の思想感情――國民性――といふものゝわからない所から起る問題で、これによつても、更にその國民性を最もよく窺ひ得る文學とその歴史――文學史――が大切なものであるといふ事がわからう。

英國なら英國といふ國を知るには、財政上、軍事上、教育上などから、統計上の調査で現況を窺ひ知つただけでは、英國といふ國はわからぬ。その國民の思想感情までを究めて、そこではじめて英國の今日の設備といふものがわかるのである。それには度々繰返していうた通り、英國國民の文學と文學史――これは藝術方面のこと全部を含めても勿論よい――といふものゝ研究が、大切になつて、それから英國の國民性と

か國民精神とかを窺ひ知る事が出來るやうになる。

これを日本の場合に考へたのが、日本文學とその文學史とである。文學といへば、直ちに懦弱な事、舊い思想で云へばこれを婦女子の文字として貶し去る一面の考もあつて、剛健の風には、文學などは全く不必要であるといふ事も聞くが、吾々は上述し來つた立場に立つて、わが光輝ある帝國の文學が、どんな風に變遷發達し來つたかを見たいと思ふ。

二、我が國の文學史

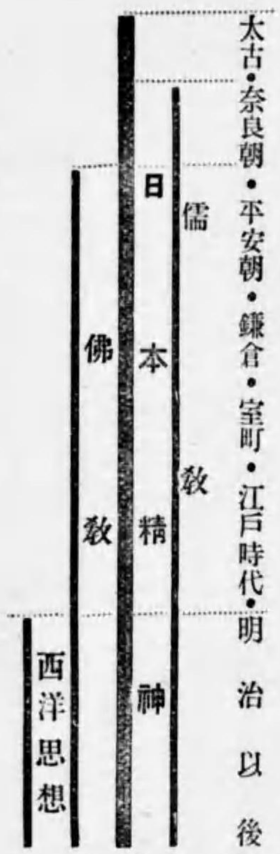
わが國を建設して、今日まで隆昌に赴かしめた民族の發生地や、その經過に就いては、從來いろ〳〵の學者が熱心に研究をしてゐる所であるが、何分古い事で、確實な材料が乏しい爲、議論は多く、結着する所が未だ不明瞭のやうである。たゞ、比較言語學の上から日本語はウラルアルタイック語族に屬して、朝鮮から滿洲の一部、それから北西に一の語系をなして居るといふ事が云へるやうであり、また、考古學上や人種學上から南洋にも關係を有するものであるといふ事は間違ないと、今日見られて居る。ともかくも、この細長い島々の國に、何處からか――それは一方面からばかりでなく――人が來て、住居を定め、子孫を殘し、所謂國家を形成したものに違ひない。昔は神樣の事や神代の事を論じたり研究したりするのは、もつたいない、畏れ多い、そんな事は云はない方がよい、といふ考があつたけれども、今日の世の中では、それでは到底滿足されるものではないので、研究は研究、尊敬は尊敬、而もこの兩者が決して兩立しないものではないのである。

かくの如くして、その結論に達するのは、さて何時の事かわからぬけれども、研究は日に日に進んで居る。吾々日本人といふものゝ祖先、即ち一體どうして日本人といふものが出來たのであらうかといふ事は、曩に述べたやうに、明瞭にはわからぬけれども、日本人といふものが出來、隨つて日本國が出來た事と、その以後今日までに進んで來た經過は、實際事實に現はれて居る。然らばその事實が、どんなものであるか。

それを知るには、先づ殘つたものゝ中、書いたものが、よい資料を與へてくれる。その殘されたものを讀んだり見たりして行くと、日本人――日本國――とは、こんなものであるかといふ事が、ほゞ見當が付けられる。その中の文學を取扱つて、日本人と日本國とを知らうといふのが、卽ち日本文學の研究であつて、その一面の秩序的準備が文學史である。

扨、曩に說いた通り、日本民族發生の經過は、今日の所まだ漠然として居るが、この民族が世界の大勢と共に、たとへはじめの中は小さいながらも、或種の運動を起して――夫れには刺戟もあつたであらう――一の民族としての生活を內的にも外的にも、段々と豐富にさせて行つたに違ひない。或個人が、全く孤獨の境遇では、全然人間生活を續けて行く事が出來ないと同樣に、苟も一の民族とか一の國家とかいふものが形成せられゝば、その集團は他の集團と交涉が始つて、其所にお互の影響があり、その爲に發達もし墮落もして行く事になる。わが國は幸にして今日まで、惡い意味の影響、卽ち墮落や低下をした事は無く、常に外國の文明を程よく取り入れて、而も國粹の純を失はずに進んで來た。

その影響の中、最も著しく吾々の眼に映ずるのは、支那に發生した儒敎と、印度に發生した佛敎とで、更に最近は西洋の思想が、著しく我が國民の思想及び生活に及んで來て居る。どうしてこんな事が云へるかといふと、それは我が國の過去に殘された文學を通覽して見ると、日本人の書いた文學中に儒敎や佛敎の思想が、日本人そのものの思想と化せられて、顯れて來るからである。左の圖に示す通り、日本の在來の精神といふものが中央にあつて、それに或時代から、儒敎や佛敎や西洋思想などが、中央の心棒を太くする爲、培



ふ爲に附加へられたのである。であるから、古い時代には思想の內容が單純であつたけれども、時代を下るに隨つて國民の思想は段々と色彩を添へて、內容が複雜になり、今日に於ては、在來の日本思想に儒敎佛敎西洋思想を加へたものが、日本の國民精神といふ形になつて居ると見る事も出來る。儒敎も佛敎も東洋に發達したものであるから、日本から見れば相影響した思想の範圍が東洋のみに限られて居たのであるが、最近に至つて、これが西洋にまで及び、東西兩洋を併せて所謂世界的に文明を進めて行く事になつた。從つてまた、日本の思想を物語る日本文學も、漸次世界的になる筈で、日本の文學史を見る人は、常にこの大きな眼を離れてはならぬのである。

氣候、風土から人の心が、或影響を受けるといふ事は、否まれない事實である。寒國に育つた人、暖國に育つた人、或は又實の兩親に育てられた人、さうでない境遇に育つた人、などを比べてみれば、どうしても其所に何等かの違ひが發見される。卽ちその人の思想・性質・氣風といふものは、外界の影響によつて、幾分か支配せられるのが自然である。されば一國民の思想、それを書き表はした文學、それが風土其他から、或影響を受けるのは當然で、我が國文學を見るにも、我が國の氣候や風土を無視することは出來ぬ。

古來、わが國は氣候溫和にして地味豐饒と傳へられて來たが、世界の各地と比較して果して如何であらう。地震のある國と、無い國とでは、國民の思想に影響は無いであらうか。少くとも、今、日本人が住んで居る土地よりも、もつとよい土地が、世界中に無いといふ事は云へまい。或英國人は「日本人は神經質だ。」といふ事をいうた。そしてこの詞は、たゞ一時的に一個人が云うた詞とは、認められない。英國人と比べれば、日本人は確かに神經質である。この英人が見る日本人の神經質は、何處から來るのであらう。

私は暑い日には、どうも身體がだらけて何事もしたくないやうになり、寒い日にはなんだか身體も心も緊張する。これは、私一個の經驗であるが、これを一國民にとつ

て考へて見る時にも、年中いら〳〵してゐる國民と、ゆつたりして居る國民とは大體論からいうて、氣候・風土の影響もあるといふ事がいへはせぬか。日本が氣候溫和、地味豐饒ではない土地に居るからというて、決して恥ではない。獨逸や露國のやうに、地味或は日本より豐饒でない土地に國をなしても、隨分立派な事はやり得る。從來、日本人は氣候溫和、地味豐饒の土地に住んで居るのであるから、安心である、平靜である、といふやうな思想がもし日本人間にあつたとすれば、それは戒める必要がある。この見方からしても、日本文學の裏面にあらはれる、國民の思想といふものを洞察して見たい。

三、國文學の種類

どこの國の文學を見ても、これを大別すれば、散文と韻文とになる。日本の文學もその通りであるが、概していふと、國文學には散文にも韻文にも小さな形——短文や發句——であらはされるのが、一つの傾向であるらしい。歌謠或は詩篇の如きは、この傾向を明らかに語るもので、西洋の Shakespeare, Byron, Göthe, Schiller の詩篇や戲曲に匹敵する國文の韻文は見當らない。支那のもの、印度のものと比べても、我が邦の韻文は、小さい所に特長を有するといふ事がいひ得られる。

散文・韻文の定義・意義といふものも、極めてむづかしいもので、支那や西洋の定義を持つて來ても、語の性質そのものが違ふのであるから、全然當嵌るといふ事は出來ない。律とか metre とかいふものは、各それらの國の詞に存するもので、我が邦の詞には存しない。我が邦の韻文といふものは、或定つた規律のもとに言語を配列した文學であつて、特別の配列がない文學が散文であるといふより他に、仕方がないのである。この意味に於て、國文學中の韻文とは

長歌・短歌・連歌・俳諧・俳句・淨瑠璃

などをいひ、散文とは

物語・戰記文・小說

などを指す事となる。二千年の久しき間、この二種の文學がいつも中絶する事なく、次第に發達し來つた事は事實で、これを時代順に、もう少し詳しく述べると次のやうになる。

（一）奈良朝以前　これは神代から崇峻天皇の御代までを指していふのであるが、この間のは祝詞と和歌とがその今日に殘された全部で、兩方とも、まだ外來思想の影響を受けない時代の文學である爲に、文質が素朴ではあるが、内容から論ずれば幼稚といふ事は避けられぬ。

（二）奈良朝時代　推古天皇から桓武天皇の平安奠都頃までをいふ。この時代は、漢學や佛教の影響が、既に多くの文學上に見えて居り、文學としては和歌が最も多く行はれた時代で、その他に、宣命（せんめう）や二三の叙事文が存する。

（三）平安朝時代　桓武天皇の平安奠都から後鳥羽天皇の御代に頼朝が幕府を鎌倉に開いた頃までをいふ。此の時代は男子の文學もあつたが、その特長としては、女流の文學者が輩出して、物語に不朽の文字を殘したことで、和歌も、また前の時代を受けついで隆盛を極めた。要するに、この時代の文學は貴族の手にあつた。

（四）鎌倉室町時代　鎌倉時代とは、鎌倉の開幕から後醍醐天皇の建武中興頃まで。室町時代とは、それから後陽成天皇の御代、德川家康が征夷大將軍となつた頃まで。文學には、佛教の影響が殊に著しくあらはれて、和歌にも散文にも厭世的傾向があつたといふ事は云ひ得よう。戰記文・隨筆・謠曲・連歌などがその特色あるものである。この時代を動かした力は所謂武士のものであつて、その背後には、文筆に優れてゐたといふ立場から、僧侶といふものが大きな位置を占めて居る。

（五）德川時代　江戸に幕府が置かれてから、明治維新まで。この時代には、京阪を中心とする上方文學と、江戸を中心とする江戸文學とがある。淨瑠璃は前者で、草紙類は後者、なほ國學も興隆したが、平民文學が盛になつたことは、この時代の特長である。

舍人親王御像

（日本書紀古本集影に據る）

（六）明治大正時代　西洋文物の輸入によつて、國民は古來の思想からめざめた。文學の形式も內容も大に變化しつゝある。

第二章　奈良朝以前

一、時代の概觀

神代から崇峻天皇の御代までといふと、神代の年代は全くわからないものとして、推古天皇の御卽位が紀元一二五二年であるから、神武天皇御卽位から數へても、今日に至る迄の間の、ざつと半分に近い年代となる。それに神代が加はるのであるから餘程永い期間となる。この間日本國は果してどんな狀態であつたであらう。神代の事は、

古事記
日本書紀

の兩書が吾々に、その有樣を傳へてくれる。

古事記に就いては

本居宣長　古事記傳

が先づ最初に解說をした書物であるが、そのほか

宮士谷御杖　古事記燈
橘守部　雅古事記傳
敷田年治　古事記標註
吉岡德明　古事記傳略
大久保初雄　古事記講義
池邊義象　古事記通釋
澁川玄耳　三體古事記
久田潤　古事記新講
植松・大塚　古事記全釋

などの註釋書がある。また、日本書紀の註釋書には、

卜部懷賢　釋日本紀
谷川士清　日本書紀通證
河村秀根　書紀集解
橘守部　稜威道別
飯田武鄕　日本書紀通釋

さて、これらの書物に叙述された神代とはどんなものであらうか。

神代以來、奈良朝に至るまでの國民生活、これを一言にして云へば、簡單素樸といふ以外に出ないのはいふ迄もない。その住居の形式は――穴居などといふ事も考へ得る――食物の有樣――現今内地の各所からこれらの石器や土器が發掘せられる――衣服の狀態――ほゞ今日から想像はつくが、要するに比較的寒氣の烈しくない九州から、中國本土にかけて、今日では想像も及ばぬ簡單な生活を營んで居たに相違ない。この期間は全くわが日本の搖籃時代であるから、隨つて思想は頗る簡單。一面から云へば貧弱といふ事にもなる。

二、神代文字

世に或は、神代に既に文字が存して居たといふ說を稱へて、平田篤胤の如きは、それに關する著述まであるが、今日北海道小樽の手宮に殘されたほりものなども、神代の文字として見る事は、穩當な說であるまいといふ事に一致して居る。であるから、この時代に書き殘されたもの、或は刻して殘された文字といふものは、今日絕對に無いといふ事になる。然らば、神代の事は、事實に遠くても近くても、一體どうして吾々に傳はつたのであらうかといふと、それは或は語部（かたりべ）といふ役人が宮中にあつて、文字の無い時代に、すべての出來事を暗記して、代々語り傳へたものであらうかといはれて居る。この語部についても、果して代々さういふ職掌があつて、事細かに十分語りつぎ言ひついだものであらうか、或は單に宮廷の儀式として、或種の歷史を語つた役人を指すのでは無からうか、といふいろいろの說もあるが、古事記の序文によつても、ともかくも、何か出來事卽ち歷史を語り傳へ云ひ傳へた事があるには相違ない。この語り繼いだ話が、元明天皇の御代に古事記となつて、はじめて文字にあらはされたのは事實である。

文字の無い時代。記錄のない時代。それが神代から奈良朝以前なのであるから、こ

こにその時代の文學を說くのも、曩に述べた語り傳への文學である事を忘れてはならぬ。

三、漢字の傳來

我が國の初に文字は無かつた。そこへ支那との交通が開けて、應神天皇の御代に朝鮮の使者たる阿直岐と博士王仁とが來朝して、天皇の皇子稚郎子に經書を献つた。それが日本に外國書――外國文學――の入つた最初とせられて居る。尤もこの以前にも、私に漢文學が入つた事はあるに違ひないのであるが、廣く流布する事はなかつたので、この献書以來宮廷を中心に、日本人は支那の文字を借りて、その思想を發表した事になる。

四、我が國の文字

こゝに序を以て我が國の文字の事を言ふ。前に述べたやうに、神代文字の存在は、信じられない。漢文字は輸入によつて、日本人が常用するに至つた。所が、現在吾々が日常用ゐて居る文字の種類を考へて見ると、かなり多樣にある。その種類は、

漢字　片假名　平假名　ローマ字

と先づこれだけある。平假名や片假名は、どうして我が邦の人の常用となつたのであるか。漢字渡來の當時は、勿論假名がなかつたから、日本人が其の思想を書きあらはすにも漢字を以て漢文を綴り後には漢字の音を假りて日本音を寫し文章を綴つた事もある。けれども、それでは隨分不自由な事が多い。止むを得ずいろいろの事を案出して、文體には後に示す古事記の文のやうな音と訓とを合せ用ゐるやうな事となり、これが段々進んで、支那の草書に關係して、平假名が出來、或は畫を略して片假名といふものが生れた。いろは四十八文字は僧空海卽ち弘法大師が發明したといひ、片假名は吉備眞備が作つたなどゝ、古い時代には一時信じられた事もあるけれども、今日の所では、もはやこれを信ずるものはない、假名そのものゝ研究をして見ると――古文書に付けられた假名によつて――平假名も片假名も、或一時代に或一人に依つて完成せら

れたものと見るよりは、或時代を通じ、國民の多數によつて、漸次に發達して今日に至つたものと見る方が、穩當と考へられるやうになつた。

ローマ字は和蘭語の輸入――維新前――以來、我が邦に入り來つたもので、今日では、鐵道の停車場の名には、必ずこれを併用するのが常習となり、其の他にも多く用ゐられて居る。一面から見れば、國語をあらはす爲に我が邦在來の文字と、新入のローマ字とを併用するのは、をかしな事の樣に思はれるが、我が邦が東洋だけの交際をやめて、世界各國と交通するやうになつた以上、その方面の影響を受けるのも當然であると見れば、見られない事もあるまい。支那の鐵道停車場名も、日本と同樣に二箇國字で書いてある。和蘭・白耳義も二箇國字又は二箇國語で掲示してある。たゞ日本の將來の文字については、東洋式と西洋式とが、あまりにその形狀及び成立を異にして居る點から、果して將來どんな事になるだらうかは、わからないと同時に、大いに注意すべき問題であらうと思はれる。

文字が以上の有樣であると同じやうに、文體も樣々であるのは、當然で、曩にも云つた通り、漢字漢文が輸入せられた時、日本の文字も文章も出來て居ない時には、支那そのまゝの文體を用ゐて居たが、假名の發明があり、こゝに日本の詞を、そのまゝうつし出す事がかなり容易になつた爲に、又或文學上の努力があつた爲に、雅文とか、漢文直譯體とか、遂には漢字交り文とか、言文一致文とかいふものを、生ずるに至つた。これらの事實は、次々に述べる各時代の文學及び其の文例などで一々明らかになる筈であるが、一先づ大體の傾向と範圍とをこゝで述べて置く。

五、歌謠

何れの國の原始文學も、韻文の方が散文に先立つて居るのは普通で、これは何れも、文字の無い時代に、所謂口ずさむといふ上から、調子のあるものゝ方が先に生れ、かつ殘されるのであらう。我が邦に於ける場合も之と同じく、歌謠が散文に先立つて居る。

夜久毛多都　伊豆毛夜幣賀岐　都麻碁微爾　夜幣賀岐都久流　曾能夜幣賀岐袞

（八雲たつ　出雲八重垣　妻ごみに　八重垣つくる　その八重垣を）

これは有名な歌で、須佐之男命がその妃櫛名田姫のために、出雲の國、簸の川上の須賀といふ所に宮をお作りになつた時、雲のたち騰る有樣を見て、歌はれたものである。

これが果して須佐之男命の詠ぜられたものそのまゝに傳へられたか否かは別の論として、今は假りに記紀に殘されたものを取つて、神代の作に近いものとして考へるのである。

この他、大國主命・沼河姫・下照姫・須勢理姫・豐玉姫などの作歌も傳へられてある。豐玉姫命には、その妹の玉依姫に託して、彦火々出見命に奉られた歌に

阿加陀麻波　袁佐閇比迦禮杼　斯良多麻能　岐美何余曾比斯　多布斗久阿理祁理

（赤玉は　緒さへ光れど　白玉の　君がよそひし　たふとくありけり）

といふのがあるが、これらの歌を見て、感ずる事は、第一に、それが、五七の調である事で、これは日本二千五百年、或はもつと永い間を通じて、少しも變化しない調子である。

神代から人皇の世に入つては、天皇をはじめ奉つて、皇后及び群臣の作歌は、記紀——古事記と日本紀——に多く載せられてある通りで、神武・景行・應神・仁德・允恭・雄略の諸帝をはじめ、菟道稚郎子・磐之姫・衣通姫・影姫・勾大兄皇子など、澤山にある。今次にその數例を示す。

神武天皇

美都美都斯　久米能古良賀　阿波布爾波　賀美良比登母登　曾泥賀母登　曾泥米都那藝弖　宇知弖志夜麻牟

（みつみつし　久米の子等が　粟生には　韮一本　其根がもと　其根芽つなぎて　擊ちてしやまむ）

美都美都斯　久米能古良賀　加岐母登爾　宇惠志波士加美　久知比比久　和禮波和須禮士　宇知弖斯夜麻牟

（みつみつし　久米の子等が　垣下に　植ゑし薑　口ひびく　我は忘れじ　擊ちてしやまむ）

加牟加是能　伊勢能宇美能　意麥志爾　波比母登富呂布　志多陀美能　伊波比母登富理　宇知豆志夜麻牟

（神風の　伊勢の海の　大石に　はひもとほろふ　細螺の　いはひもとほり　擊ちてしやまむ）

これは、天皇が長髓彥を擊ち給はんとせられた時の御詠で、如何にも勇氣凜凜、今度こそは是非勝たねばならぬぞ、賊を滅ぼさねばならぬぞ、との御意は、恰も明治時代にあつた日本海の海戰に「皇國の興廢此一戰に在り各員一層奮勵努力せよ」といふ信號が旗艦三笠の檣上に高く揭げられたのと、同じ意氣が見える。

雄略天皇

野麿等能　鳴武羅能陀該儞　之之苻須登　拖例柯舉能居登　飫袞麿陛儞麻鳴須　飫袞枳瀰簸賊據鳴枳舸斯題・拖麿麿枳能　阿娛羅儞陀伺　施都魔枳能　阿娛羅儞陀伺　斯斯魔都登倭我伊麻西麼　佐謂麻都登　倭我陁陁西麼　陁倶符羅爾　阿武柯枳都枳都　曾能阿武鳴　婀枳豆波野倶譬　波賦武志謀　飫袞枳瀰儞麿都羅符　儺我柯陁播於柯武　婀岐豆斯麻野麻登

（やまとの　小村の岳に　猪伏すと　たれかこの事　大前にまをす　大君は　そこを聞かして玉纒の　胡床に立たし　倭文纒の　胡床に立たし　猪待つと　わが居ませば　猪待つと　わが立たせば　手腓に　虻かきつきつ　その虻を　蜻蛉はや咋ひ　昆虫も　大君にまつらふ　汝が形は置かむ　蜻蛉島やまと）

これは、天皇が吉野に狩をし給うた時、虻が飛んで來て、天皇の御手に咋ひついた。所がそこへ蜻蛉が飛んで來て、その虻を咋つてしまつた。天皇はその蜻蛉の功を賞する歌を、左右にもとめ給うたが、誰も詠み進むものがないので、自ら詠じ給うたものである。

麻岐牟久能　比志呂乃美夜波　阿佐比能　比傳流美夜　由布比能　比賀氣流美夜　多氣能泥能泥陀流美夜　許能泥能　泥婆布美夜　夜本爾余志　伊岐豆岐能美夜　麻紀佐久　比能美加度　爾比那閇夜爾　淤麥陀弖流　毛毛陀流　都紀賀延波　本都延波　阿米袁淤岐理　那加都延波　阿豆麻袁淤岐理　志豆延波　比那袁淤岐理　本都延能　延能宇良婆波　那加都延爾　淤知布良婆閇

那加都延能　延能宇良婆波　斯毛都延爾　湌知布良婆閉　斯豆延能　延能宇良婆波　阿理岐奴能
美幣能古賀　佐佐賀世流　美豆多麻宇岐爾　宇岐志阿夫良　湌知那豆佐比　美那許袁呂許袁呂
爾　許斯母　阿夜爾加志古志　多加比加流　比能美古　許登能　加多理碁登母　許袁婆
（巻向の　日代の宮は　朝日の　日照る宮　夕日の　日かげる宮　竹の根の　根足る宮　木の根の
根ばふ宮　八百土よし　い杵築の宮　眞木さく　檜の御門　新嘗屋に　生ひ立てる　百足る　槻
が枝は　秀枝は　天を覆へり　中つ枝は　東を覆へり　下枝は　鄙を覆へり　秀枝の　枝の末葉
は　中つ枝に　落ちふらばへ　中つ枝の　枝の末葉は　下枝に　落ちふらばへ　下枝の　枝の末
葉は　あり衣の　三重の子が　捧がせる　瑞玉盃に　浮き脂　落ちなづさひ　水こをろこをろに
此しも　あやに畏し　高光る　日の御子　事の　語事も　こをば）

この歌は、やはり雄略天皇の御代に、天皇が長谷の百枝槻の下で、豊樂をきこしめす時に、三重の采女が御盞を献つた。所がその御盞の中に、何時の間にか、槻の葉が落ち浮かんで居たのを、采女は氣づかずに捧げた。天皇はそれを御覽遊ばして、いたく御立腹、采女をその場に斬り給はんとなされたが、采女は、おのれが粗忽を悔い、先づ陛下の御猶豫を乞うて詠んだのがこれである。

柯羅倶爾能　基能陪儛爾陀致底　於譜磨故幡　比例甫曜須母　耶麗等陛武岐底
（韓國の　城の邊に立ちて　大葉子は　領布振らすも　日本へ向きて）

これは、かの有名な伊企儺が、新羅の軍に虜にせられた時、新羅の將は彼を殺さんとして脣を日本に向けしめ、「日本の將我がしりの肉を嚙へ。」と呼べと命じた。所が伊企儺は勇猛の人であつたから、反對に「新羅王わがしりの肉をくらへ。」と叫んで遂に殺されてしまつた。この時、その妻の大葉子もまた捕へられて居たのであつたが、夫の殺されるのを見て詠んだのがこの歌である。

これらの和歌は古事記と日本紀とに出て居る。

この兩書の歌ばかりを集めたものに
林　諸　鳥　記紀歌集
があり、それを解釋したものに

僧　契沖　厚　顔抄
賀茂眞淵　古事記和歌略註　日本紀和歌略註
荒木田久老　日本紀歌廼解
橘守部　稜威言別
太田水穂　記紀歌集講義

などがある。

六、祝詞　壽詞

この二つは、いづれもこの時代の末に出來た散文であつて、共に神前に祭祀の所以を陳じ、神德をたゝへ或は神代の舊事、遠祖の事蹟を述べて、御代を祝する詞である。であるから、この祝詞や壽詞を、神前に列する群臣はもとより、地方田舍の庶民も、漸次に傳聞して、建國の基本を明らかにし、また一方には國人の心を公明ならしめた間接の力があつたに違ひない。

祝詞も壽詞も、共に句節を整へ、枕詞を冠し、對句と疊語とを用ゐて、誦するに便、傳ふるに易く出來て居る。祝詞には、

祈年祭　大祓　大殿祭

などが最も古く、壽詞には

出雲國造神賀詞

がある。いづれも、詞もうるはしく、調も高雅である。これらは「延喜式」といふ書物の中に記されて、今日に殘され傳へられてゐる。

祝詞の起源は、天照大神が天の窟戸に籠りました際、天兒根命が奏し給うた太諄辭に發するのであらうが、これは今日に傳はつて居らぬ。賀茂眞淵は、出雲國造神賀詞は舒明天皇の朝に作られたものであり、大祓詞は天智天皇か天武天皇の頃かに作られたのであらうと說いて居るが、要するに確かな年代はわからないのである。

文體は、漢字の正訓と正音とを併用して、用言の語尾と助辭とを細く書き、すべて國語のまゝにうつし出たものである。

祈年祭

集侍神主祝部等諸聞食登宣「神主祝部等共稱唯餘宣准此」高天原爾神留坐皇睦神漏伎命神漏彌命以天社國社登稱辭竟奉皇神等能前爾白久今年二月爾御年初將賜登爲而皇御孫命能宇豆能幣帛乎朝日能豊逆登爾稱辭竟奉久登宣

御年皇神等能前爾白久皇神等能依左志奉牟奥津御年乎手肱爾水沫畫垂向股爾泥畫寄氐取作牟奥津御年乎八束穂能伊加志穂爾皇神等能依左志奉者初穂乎波千穎八百穎爾奉置氐瑞閉高知瑞腹滿雙氐汁爾母穎爾母稱辭竟奉牟大野原爾生物者甘菜辛菜青海原爾住物者鰭能廣物鰭能狹物奥津藻菜邊津藻菜爾至氐御服者明妙照妙和妙荒妙爾稱辭竟奉牟御年皇神能前爾白馬白猪白鷄稚稚色物乎備奉氐皇御孫命能宇豆乃幣帛乎稱辭竟奉久登宣（下略）

（集はれる神主祝部等諸聞しめせと宣る「神主祝部等共に唯と稱す餘の宣も此に准へ」高天の原に神留ります皇が睦神漏伎の命神漏彌の命もちて天つ社國つ社と稱辭竟へ奉る皇神等の前に白さく今年の二月に御年初めたまはむとして皇御孫命のうづの幣帛を朝日の豊榮登に稱辭竟へ奉らくと宣る

御年の皇神等の前に白さく皇神等の依さし奉らむ奥つ御年を手肱に水沫畫き垂り向股に泥畫き寄せて取作らむ奥つ御年を八束穂のいかし穂に皇神等の依さし奉らば初穂をば千穎八百穎に奉り置きて瑞の上高知り瑞の腹滿て雙べて汁にも穎にも稱辭竟へ奉らむ大野の原に生ふる物は甘菜辛菜青海の原に住む物は鰭の廣物鰭の狹物奥津藻菜邊津藻菜に至るまでに御服は明妙照妙和妙荒妙に稱辭竟へ奉らむ御年の皇神の前に白き馬白き猪白き鷄種々の色物を備へ奉りて皇御孫命のうづの幣帛を稱辭竟へ奉らくと宣る）

出雲國造神賀詞

八十日日波在止毛今日能生日能足日爾出雲國國造姓名恐美恐毛申賜久挂麻久毛畏岐明御神止大八島國所知食須天皇命乃大御世乎手長能大御世止齊止爲氐出雲國乃青垣山内爾下津石根爾宮柱太敷立氐高天原爾千木高知坐須伊射那伎乃日眞名子加夫呂伎熊野大神櫛御氣野命國作坐志大穴持命二柱神乎始天百八十六社坐皇神等乎某甲我弱肩爾太襷取挂天伊都幣能緒結天乃美賀祕冠利天伊豆能眞屋爾蠲草乎伊豆能席登刈敷支天伊都閉黒益之天瑞能和爾齋許母利氐志都宮爾志都米仕奉氐朝日乃豊榮登爾伊波比

乃返事能神賀吉詞奏賜波久登奏（下略）

八十日日はあれども　今日の生日の足日に　出雲國の國造姓名、畏み畏みも白し賜はく　掛巻も畏き　現神と大八島國所知めす　天皇の大御代を手長の大御代と齋ふとして　出雲の國の青垣山内に　下岩根に　宮柱太しく立て　高天原に　千木高知ります　伊邪那岐の日眞名子　加夫呂伎熊野大神櫛御毛野命　國作りましし大穴持命　二柱の神を始めて　百八十六社に坐す皇神等を　某甲が弱肩に　太襁取りかけて　伊都幣の緒結び　天の御翳と冠りて　伊都の眞屋に麤草を　伊都の席と　苅り敷きて　伊都閉黒まし　天の甕和に　齋みこもりて　志都宮に　鎭め仕へ奉りて　朝日の　豐さかのぼりに　祝の返事の神賀の吉詞　奏し賜はくと白す。

以上はほんの一例であるが、祝詞壽詞に就いて特に注意すべき事は、この時代に作られた純なるものが、現在にどれ程殘つて居るかといふ問題である。後世まで度々同じ種類の祝詞壽詞が、神前に奏された事から考へても、後人の潤色した部分もかなり多いに違ひない。

祝詞壽詞に就いて、從來研究せられた書物には

賀茂眞淵　祝詞考
本居宣長　大祓詞後釋
藤井高尙　大祓詞後々釋
本居宣長　出雲國造神壽詞後釋
鈴木重胤　祝詞講義
久保季茲　祝詞略解

などがある。

第三章　奈良朝時代

一、時代の概觀

推古天皇から桓武天皇まで、十八代二百年ばかりの間。この時代は要するに前代から漸々輸入せられて國内に勃興の氣運にあつた、漢學と佛教とが、此の期間に深く日本人の間に侵入して、政治に文教に、影響を受けないものは一つもない有樣となつた。その爛熟した結果は、實に大化の新政であつて、恰も德川幕府の末、西洋の文物が切りに輸入せられて、攘夷の大論も何のその、自然の勢を以て、明治の維新が成立したと同樣の有樣である。今日各地に鐵道がひかれ、大きな港から西洋行の汽船が出て行く有樣と等しく、當時の奈良地方には、佛寺の建立が讀經の聲と共に起り、一方漢學の教養所も建設せられ、秀才は選ばれて留學生となつて續々支那に渡る有樣となつたのである。

殊に、元明天皇が都を奈良に遷したまうた後は、それ迄は皇居が一世一代であつたのが、永久の帝都といふ事になり、青丹よし奈良の都は、前代未聞の繁華を呈して、その規模はもとより、後の桓武天皇の平安京と比べては、小さかつたであらうが、設計は唐の長安の制に則とられて、新都の面目は國運と共に新たなものがあつたのである。聖武天皇の天平時代は、なかにも百花繚亂といふ有樣で、特に佛教の隆盛は一時その極に達したといひ得る。

なほ特に、この時代に就いて注意せねばならぬ事は、當時に興つた美術——佛教美術——彫刻——である。今日一度奈良の地に遊んだ人は、何人も法隆寺藥師寺などの佛像の如何にも美術的であるのに驚くであらう。其のほか、正倉院の御物に殘る美術品の各種。もとよりこれらは輸入品そのまゝのものもあり、或は彼の國から渡來した佛師の手になつたものも多くあらう。けれども日本人が、此等の大藝術を受入れて、これを理解し得る迄に、進んで居たといふ事は否まれぬ。卽ち奈良朝の文化の程度ゞ

しふ事は記錄に殘された、所謂文献の側から窺ふと同時に、一方この美術方面の探究を待つて更に啓發せられる所が大きいのである。

二、固有の文學

そこで、かくの如く外來の思想が輸入せられ、隨つて我が邦の文物彼も此も模倣を第一とした時代の、わが國文學は果してどんな風であつたらうか。

今、此の期に出來た重な作品を擧げてみれば、

散文に　古事記　風土記　氏文　祝詞　宣命

歌謠に　萬葉集

がある。これに就いては、なほ後に詳しく述べるのであるが、概して一言すれば、漢文學や佛敎の、かほど盛であつた時代――美術上などには、ほとんど日本人の美術心を彼の國のものに引込まれてしまつた樣にも見える時代――にも係はらず、わが文學の上からは、やはり純然たる固有の思想を持つて居たやうに窺はれるので、流石に外來の文物思想もまだ、わが國民の內的生活――心の奧――までには入り込む事が出來なかつた有樣に見える。眞情は不用意に吐露されるものであるとすれば、この時代の文學、特に歌謠を通じて窺ふ國民の心理には、まだ外敎の影響が甚だ少く、國文學を一貫する純然たる一の思想は、ゆるがず動かず殘されたと云ひ得るであらう。

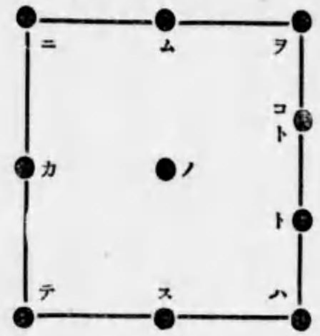
次に、この時代の言語と文章とは、どんなであつたであらうか。前の時代に擧げた文章の數例は、此の期に書きあらはされたものであるから、大體の見當は旣について居る筈であるが、「はなしことば」としても、漢學佛敎の流行につれて、その方面の「ことば」が澤山、日常の使用語に入つた事は疑ない。今日、吾々がランプ、テンプラ、カッパ、プロペラーなどと云ふ詞を、平氣で用ゐて居る樣に、當時では、一寸めづらしかつた塔とか詩とかいふ詞を、或はハイカラがつて用ゐたかも知れぬ。然しながらもと漢音梵音といふものは、我が邦のそれと全然異るものであるから、よくはわからぬが、今日に殘つた書き物の上から調べて見ると、外國音そのまゝではなく、多少音

韻を變化させて、我が邦の音に不調和がないやうにしたのであらうと、思はれる節がある。これは、今日の外國音を取入れる有樣から考へて、さもあるべき事と信じられるであらう。

文章の方は、漢文そのものを綴るといふ事が、盛になつた。これを平たく說明すれば、漢字がはじめて入つた頃にはその字を借りて、日本語を寫すといふ傾向――ローマ字で日本語を綴ると同樣なやり方――もあつたのであるが、この時代卽ち漢學が隆盛になつた時代には、日本人がその思想をあらはすに、漢文そのものを用ゐるやうな傾向が增したのである。畢竟漢文を綴る事が上手に容易になつたといふことになる。古事記の文章は、大體漢字を借りて、日本語で書いたものであるが、日本書紀の文章は特例を除けば漢字を以て漢文に綴つたのである。であるから、古事記の方は、支那人には讀めず、日本書紀の方は支那人にも意味が通ずる。そして、日本書紀の方はかへり點をつけて――日本讀にすれば、出來ない事もないといふ次第である。

この傾向が、言文不一致の源であつて、詞が異ふ所へ、同じ語系でない國の文字を借用したといふ點に、無理があつたのである。日本は今日まで、とかく文章と口語とに、大きな隔りがある所以である。

漢字の借用といふ事は、どうしても無理を生ずるので、日本詞の爲に、假名が生れた事は、既に前章にも說いたが、なほ假名がまだ生れない時分、漢文を讀みかつこれを敎へる、又これを廣く傳へるには、どんな方法をとつたか。それには「點」といふものがある。この點の事は、普通に「ヲコト點」と稱して、一例をいへば圖の如く漢字の一字の上下左右に點を打つて、その點の所在によつて、日本語日本音のヲとかハとかを示して讀めるやうにしたものである。



この「點」は、假名が出來てからは、無用のものゝやうに思はれるが、平安朝、鎌倉、德川時代までもなほ、學者の

間に用ゐられて、この點を心得る事が、學者の大きな一の資格になつて居たものである。點と假名と、どちらが早く生れ、全く假名の無い時代は點ばかりで、漢文を讀む資としたかといふ事になると、今明瞭に、點の方が早く生れたとか、假名はその後に起つて一般的になつたとか、答へかねるのであるが、暫くの間、これが兩用せられて居た事だけは確かで、文字としての假名と、性質こそ全然違ふが、此所に點といふものもあつたといふ事は知つて置かねばならぬ。

今一つ重要な事は、印刷術の事である。孝謙天皇の頃に、支那から印刷術が傳來したらしいのであるが、その後日本でこれが大いに發達した譯ではない。今日に殘つて居る印刷物で一番古いものは、彼の百萬塔の中の陀羅尼四種であるが――法隆寺に現存する――、これは百萬といふ數を、實際印刷したものであらうから、隨分發達した術が既にあつたのである。印刷の事が、文明の增進に大きな關係のある事は、今日の狀態から見ても、直ぐにわかる事であるが、我が邦の此の當時の印刷術は、どういふ譯からか、一般に及ばず、書物乃至經文等の印行されたものは、今日に殘つて居らぬ。

三、歌謠

歌は自然の聲である。自然の聲とは、天性の眞と、敎化せられた純との、交りである。日本人が、この風土に住み、多く植物性の食物をとつて、外國の壓迫が激しくなく、比較的安穩に生活して行つた太古の時代は、既に述べたが、儒佛二敎が入つてやや生活上に複雜を來したこの期の歌謠は、どんなものであつたらうか。

儒佛二敎の影響が、人の心の奧までは浸み込んで居なかつたといふことは曩に說いたが、人智は前期に比して甚しく進んで居る。來朝の支那人及び韓人は詩を賦して邦人に示した。今迄は、他と交涉がなかつたものゝ、一度外國の發達を見て、これと知識を交換すれば、誰でも奮發競爭の念の起るのは當然である。その影響を受けて前期に見えなかつた複雜な感想も、微細な觀察も、この期の歌謠にあらはれ、詞形もまた大

いに整うて來た事は、一々その例がこれを示してゐる。持統天皇の朝に柿本人麿、山部赤人等の出づるに及んで、和歌は極盛の運に到達した。殊にその長歌に至つては、後代に比を見ない有樣で、卒直な感情を、そのまゝにいひ現はした點、歌調の莊重雄大な點、何れも古今無類といひ得る。

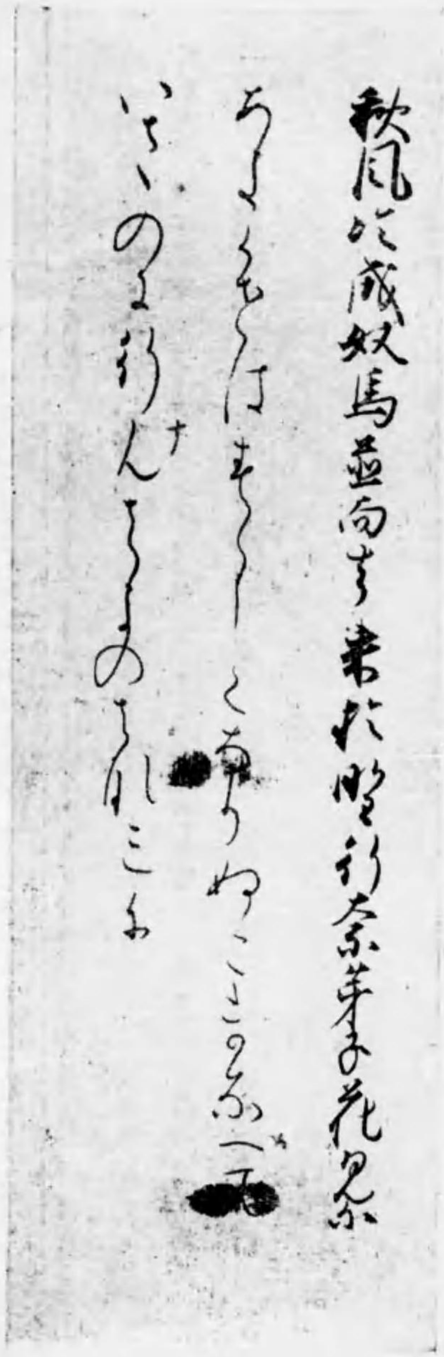
四、萬葉集

萬葉集の出來た時代と、その撰者とについては、古來いろいろ議論の多い所であるが、要するに、聖武孝謙の兩朝に、大伴家持（やかもち）が、私に撰んだものが主體であるといふのが穩當な說である。

載錄せられた歌は、仁德天皇の御宇から、淳仁天皇の朝に至るまで、凡そ四百年間に亙つて居るが、大部分は天武天皇以後九十年間ばかりのもので、歌の數はすべて四千四百九十六首。卷數は二十卷ある。歌の形體に從つて、

長歌　短歌　旋頭歌　連歌

などの名目を立て、別に反歌と稱して、長歌の末に、一二首添へたものがある。この反歌は、舒明天皇の頃から出來たものであるが、通常の短歌と同形で、本歌である長歌の意の足らない所を補ひ、または長歌の大意を約言したものである。この集はまた



元暦校本萬葉集の一部（萬葉集諸本輯影卷上に據る）

歌の内容によつて、部類を立てゝある。

雜歌　相聞　挽歌　譬喩歌　四季相聞　四季雜歌

などがそれで、その外東歌、防人の歌などゝいふのもあるが、これは今日でいへば、地方の俗謠のやうなもので、詞はやゝ鄙びて居る。

萬葉集の歌の書き方――文字の使用法――は凡て漢字ばかりを用ゐてあるが、これは一種獨特の用法で、音訓相交へて書いてあるので、これを讀むには、非常に骨が折れる。この書方を稱して今は「萬葉書」といひ、これらの文字を總稱して「萬葉假名」というて居る。山上復有山と書いて「出」(いで)と讀ませたり、十六と書いて「猪」(しゝ)と讀ませたり、中には滑稽に類したものさへある。

五、柿本人麿

人麿の傳記は詳かでない、持統・天武の二朝に仕へて、官位は餘りに高くなく、後に石見國に住んで、其所に終つたと傳へられる。傳記はこれだけしかわからぬが、その殘した歌は短歌長歌頗る多く、短歌も山川の風物から旅行、戀愛の情を歌つて、趣の深いものが多い。けれども人麿の人麿たる所は、長歌にあるので、文辭の端正、格調の雄大、萬葉集中、この人の右に出づるものは恐らくあるまい。中にも高市(たけち)皇子の薨去を悲んだ歌の如きは、集中の最大長篇で、而も最大雄篇といふ事が出來る。

高市皇子殯宮の時

挂文　忌之伎鴨　言久母　綾爾畏伎　明日香乃　眞神之原爾　久堅能　天津御門乎　懼母　定賜而　神佐扶跡　磐隱座　八隅知之　吾大王乃　所聞見爲　背友乃國之　眞木立　不破山越而　狛劍　和射見我原乃　行宮爾　安母理座而　天下　治賜　食國乎　定賜等　鳥之鳴　吾妻乃國之　御軍士乎　喚賜而　千磐破　人乎和爲跡　不奉仕　國乎治跡　皇子隨　任賜者　大御身爾　大刀取帶之　大御手爾　弓取持之　御軍士乎　安騰毛比賜　齊流　鼓之音者　雷之　聲登聞麻低　吹響流　小角乃音母　敵見有　虎可吼吼登　諸人之　協流麻低爾　指擧有　幡之靡者　冬木成　春去來者　野毎　著而有火之　風之共　靡如久　取持流　弓波受乃騎　三雪落

冬乃林爾　凰可母　伊卷河等　念麻低　聞之恐久　引放　箭繁計久　大雪乃　亂而來禮　不奉
仕　立向之毛　露霜之　消者消倍久　去鳥乃　相競端爾　渡會乃　齋宮從　神風爾　伊吹惑之
天雲乎　日之目毛不令見　常闇爾　覆賜而　定之　水穗之國乎　神隨　太敷座而　八隅知之
吾大王之　天下　申賜者　萬代　然之毛　將有登　木綿花乃　榮時爾　吾大王　皇子之御門
乎　神宮爾　裝束奉而　遣便　御門之人毛　白妙乃　麻衣著　埴安乃　御門之原爾　赤根刺
日之盡　鹿自物　伊波比伏管　烏玉能　暮爾至者　大殿乎　振放見乍　鶉成　伊波比廻　雖侍
候　佐母良比不得者　春鳥之　佐麻欲比奴禮者　嘆毛　未過爾　憶毛　未盡者　言左敵久　百
濟之原從　神葬　葬伊座而　朝毛吉　木上宮乎　常宮等　高之奉而　神隨　安定座奴　雖然
吾大王之　萬代跡　所念食而　作良志之　香來山之宮　萬代爾　過牟登念哉　天之如　振放見
乍　玉手次　懸而將偲　恐有騰文

（かけまくも　忌々しきかも　言はまくも　綾にかしこき　明日香の　眞神の原に　久堅の　天
津御門を　かしこくも　定め給ひて　神さぶと　磐かくります　八隅しし　吾大王の　きこし
めす　背友の國の　眞木立つ　不破山越えて　狛劒　和射見が原の　行宮に　あもりいまして

天の下　治め給ひ　食國を　定め給ふと　鳥が鳴く　吾妻の國の　御軍を　召し給ひて　千
はやふる　人をやはせと　まつろはぬ　國を治めと　皇子ながら　任け給へば　大御身に　大
刀取り帶ばし　大御手に　弓取り持たし　御軍士を　あとともひたまひ　齊ふる　鼓の音は　雷
の　聲と聞くまで　吹きなせる　小角の音も　敵見たる　虎か吼ゆると　諸人の　おびゆるま
でに　さゝげたる　幡の靡きは　冬木成　春去りくれば　野毎に　つきてある火の　風のむた
靡ける如く　取持てる　弓筈の騒ぎ　三雪ふる　冬の林に　嵐かも　い卷きわたると　念ふ
まで聞きのかしこく　引放つ　箭の繁けく　大雪の　亂れて來れ　まつろはず　立向ひしも
露霜の　消なば消ぬべく　ゆく鳥の　あらそふはしに　渡會の　齋の宮ゆ　神風に　いぶき
惑はし　天雲を　日の目もみせず　常闇に　覆ひ給ひて　定めてし　瑞穗の國を　神ながら
ふとしきまして　八隅しゝ　吾大王の　天の下　申し給へば　萬代に　しかしもあらんと　木
綿花の　榮ゆる時に　吾大王　皇子の御門を　神宮に　よそひ奉りて　遣はしゝ　御門の人も
白妙の　麻衣著て　埴安の　御門の原に　赤根刺す　日の盡　鹿自物　いはひ伏しつゝ　烏
玉の　夕になれば　大殿を　ふりさけ見つゝ　鶉なす　いはひもとほり　さもらへど　さもら

ひえねば　春鳥の　さまよひぬれば　歎も　いまだすぎぬに　おもひも　いまだ盡ねば　言さへぐ　百濟の原ゆ　神葬（かわはふり）　葬（はふり）いまして　朝もよし　木上（このへ）の宮を　常宮と　高く奉りて　神ながら　しづまりましぬ　しかれども　吾大王の　萬代と　おもほしめして　作らしゝ　香來山の宮　萬代に　過ぎむとおもへや　天の如（ごと）　ふりさけみつゝ　玉だすき　かけてしぬばむ　かしこかれども）

短歌二首

久堅之　天所知流　君故爾　日月毛不知　戀渡鴨

（久堅の　天しらしぬる　君故に　月日も知らに　戀ひわたるかも）

埴安乃　池之堤之　隱沼之　去方乎不知　舍人者迷惑

（埴安の　池の堤の　隱沼（こもりぬ）の　ゆくへもしらに　舍人はまどふ）

人麿は、この他に哀死の詠が頗る多く、貴人では日並皇子、河島皇子、明日香皇女を悲んだ歌があり、なほ自分の妻を悼み、吉備津采女の死を悲んだものなどの長歌を

はじめ、短歌にもまた數多くのものが殘されてある。免れがたい人世の悲哀に同情を寄せて、熱涙をそゝいだ人麿の多涙多恨。彼が近江の荒都を過ぎた時の詠の如きは、天地山川の變に感じて、低徊遂に千古の絶唱をなさしめた。

過二近江荒都一時作歌

玉手次　畝火之山乃　橿原乃　日知之御世從　阿禮座師　神之盡　樛木乃　彌繼嗣爾　天下所知食之乎　天爾滿　倭乎置而　青丹吉　平山乎越　何方　御念食可　天離　夷者雖有　石走淡海國乃　樂浪乃　大津宮爾　天下　所知食兼　天皇之　神之御言能　大宮者　此間等雖聞大殿者　此間等雖云　春草之　茂生有　霞立　春日之霧流　百磯城之　大宮處　見者悲毛

（玉だすき　畝火の山の　橿原の　日しりの御代ゆ　あれましゝ　神のことごと　樛（つが）の木の　いやつぎつぎに　天の下　しろしめしゝを　そらみつ　やまとをおきて　青土よし　平山越（ならやま）えて　いかさまに　思ほしけめか　天さかる　夷（ひな）にはあれど　石走（いはばし）る　淡海の國の　さゞなみの　大津の宮に　天の下　しろしめしけむ　すめろぎの　神のみことの　大宮は　此所と聞けども　大殿は　こゝといへども　霞立つ　春日（はるひ）かきれる　夏草（なつくさ）香　繁ぐなりぬる　もゝしきの　大

宮處　見ればかなしも）

反歌

樂浪之　思賀乃辛崎　雖幸有　大宮人之　船麻如象津

（さゝなみの　思賀のから崎　幸くあれど　大宮人の　船まちかねつ）

左散難彌乃　志我能大和太　與杼六友　昔人二　亦母相目八毛

（さゝなみの　志賀の大わだ　よどむとも　昔の人に　またもあはめやも）

六、山上憶良

憶良は、天平五年齢七十四才で終つたといひ傳へる。遣唐少錄、伯耆守等を經て、神龜三年に筑前守に任ぜられた事がわかつて居る。此の人は、佛敎も信じたのであるが、漢學が最も得意であつたと見えて、詠歌の上にもその影響があらはれて居るものがある。然し敬神忠君の想を叙べたものも、尠くない。憶良はかつて、「類聚歌林」といふ歌集を作つたらしいのであるが、その書は今日には傳へられてない。

令レ反二惑情一歌

父母乎　美禮婆多布斗斯　妻子美禮婆　米具斯宇都久志　余能奈迦波　加久叙許等和理　母智

騰利乃　可可身波志母與　由久弊斯良禰婆　宇既具都遠　奴伎都流其等久　布美奴伎提　由久

智布比等波　伊波紀欲利　奈利提志比等迦　奈何名能良佐禰　阿米弊由迦婆　奈何麻爾麻爾

都智奈良婆　大王伊麻周　許能提羅周　日月能斯多波　阿麻久毛能　牢迦夫周伎波美　多爾具

久能　佐和多流伎波美　企許斯遠周　久爾能麻保身叙　可爾迦久爾　保志伎麻爾麻爾　斯可爾

波阿羅惡迦

（父母を　見れば尊し　妻子見れば　惠し愛し　世のなかは　かくぞことはり　もちごりの　拘

はしもよ　早川の　行方知らねば　穿履を　脱ぎつる如く　踏み脱ぎて　行くちふ人は　岩木

より　生りでし人か　汝が名告らさね　天へ行かば　汝がまにまに　地ならば　大君ゐます

此の照す　日月の下は　天雲の　向伏す極み　谷蟆の　さ渡る極み　きこし食す　國のまほら

ぞ　かにかくに　ほしきまにまに　然にはあらじか）

反歌

比佐迦多能　阿麻遅波等保斯　奈保奈保爾　伊弊爾可弊利提　奈利乎斯麻佐爾

（久堅の　天路は遠し　なほなほに　家に歸りて　家業を爲まさに）

沈痾之時歌

士也母　空應有　萬代爾　語續可　名者不立之而

（士やも　空しかるべき　萬代に　語りつくべき　名は立たずして）

七、山部赤人

人麿と名を同じくした歌聖であつて、同樣傳記が詳かでないが、聖武天皇の御代に赤人は盛りの齡であつたらしい。官は極く低い人で、舍人くらゐであつたらう。聖駕に從つて紀伊、大和、伊豫などに遊んだ事があり、また東國にも下つた事がある。赤人の特長は自然の美を詠ずるにあつて、聲調は閑雅、思想は穩健といひ得る。人麿は長歌に得意であるが、赤人は短歌に優れたものが多く、後世「山柿の門」などと歌道の事をいふに至つたくらゐである。

望三不盡山一歌

天地之　分時從　神左備而　高貴寸　駿河有　布士能高嶺乎　天原　振放見者　度日之　陰毛隱比　照月乃　光毛不見　白雲母　伊去波代加利　時自久曾　雪者落家留　語告　言繼將往不盡能高嶺者

（天地の　分れし時ゆ　神さびて　高く貴き　駿河なる　富士の高嶺を　天の原　振さけ見れば　渡る日の　影もかくろひ　照る月の　光も見えず　白雲も　い行き憚り　時じくぞ　雪はふりける　語りつぎ　言ひつぎ行かむ　富士の高根は）

反歌

田兒之浦從　打出而見者　眞白衣　不盡能高嶺爾　雪者零家留

（田兒の浦ゆ　打出でゝ見れば　眞白にぞ　富士の高嶺に　雪はふりける）

過二勝鹿眞間娘子墓一時

吾毛見都　人爾毛將告　勝牡鹿之　眞間能手兒名之　奥津城處

（吾も見つ　人にも告げむ　葛飾の　眞間の手兒名が　奥つ城ごころ）

勝牡鹿乃　眞々乃入江爾　打靡　玉藻苅兼　手兒名志所念

（葛飾の　眞間の入江に　打なびく　玉藻かりけむ　手兒名しおもほゆ）

若浦志　鹽滿來者　滿乎無美　葦邊乎指天　多頭鳴渡

（和歌の浦に　潮みちくれば　かたをなみ　葦邊をさして　田鶴鳴きわたる）

足引之　山毛野毛　御獵人　得物矢手挾　散動而有所見

（あしびきの　山にも野にも　みかりびと　獵矢手ばさみ　みだれたる見ゆ）

朝名寸二　梶香所聞　三食津國　野島之海子乃　船二四有良信

（朝なぎに　梶の音きこゆ　みけつくに　野島の海人の　船にしあるらし）

八、大伴家持

家持は旅人の子。聖武天皇から光仁天皇に至る五朝に歴仕して、從三位中納言、持節征東將軍に進み、桓武天皇の延暦四年に死去した。家持の家は代々軍職にあつた爲に、ひたすら誠忠をぬきんでて、父祖の名を辱しめざらんとつとめた事は、その詠の多くに見える。儒佛の思想がその詠歌にあらはれて居る程度は、人麿・赤人などよりも多いが、彼の感情は燃ゆるが如く、痛切なものが多い。

海行者　美都久屍　山行者　草牟須屍　大皇乃　敵爾許曾死米　可弖里見波勢自

（海行かば　水づく屍　山行かば　草むす屍　大君の　へにこそ死なめ　顧みはせじ）

慕レ振二勇士之名一歌

知智乃實乃　父能美許等　波播蘇葉乃　母能美己等　於保呂可爾　情盡而　念良牟　其子奈禮

夜母　大夫夜　無奈之久可在　梓弓　須惠布理於許之　投矢毛知　千尋射和多之　劍刀　許思

爾等里波伎　安之比奇能　八峯布美越　左之麻久流　情不障　後代之　可多利都具倍久　名乎

多都倍志母

（ちゝのみの　父のみこと　はゝそばの　母のみこと　おほろかに　心つくして　思ふらむ　そ

の子なれやも　ますらをや　むなしくあるべき　梓弓　すゑ振りおこし　投矢もち　千尋射わ

たし　刀劍　腰にとりはき　足びきの　八峯ふみこえ　さしまくる　心さやらず　後の世の

語りつぐべく　名を立つべしも）

反歌

大夫者　各乎之立倍之　後代爾　聞繼人毛　可多里都具我禰

（ますらをは　名をしたづべし　後の世に　きゝつぐ人も　かたりつぐがね）

○

時者霜　何時毛將有乎　情哀　伊去吾妹可　若子乎置而

（時はしも　いつもあらむを　心いたく　去にし吾味か　若子をおきて）

虛蟬之　代者無常跡　知物乎　秋風寒　思努妣都流可聞

（うつせみの　世は常なしと　知るものを　秋風さむく　しぬびつるかも）

妹之見師　屋前爾花咲　時者經去　吾泣涙　未干爾

（妹が見し　宿に花咲く　時は經ぬ　吾がなく涙　いまだひなくに）

如是耳　有家留物乎　妹毛吾毛　如千歲　憑有來

（かくのみに　ありけるものを　妹も吾も　千歲のごとも　たのみたりけり）

九、其の他の歌人

以上四家の他に、名歌は澤山にある。今その五六を擧げて見ると、

天武天皇

淑人乃　良跡吉見而　好常言師　芳野吉見與　良人四來三

（よき人の　良しと　よく見て　よしと云ひし　吉野よく見よ　よき人よく見つ）

額田女王（春秋競の歌）

冬木成　春去來者　不喧有之　鳥毛來鳴奴　不開有之　花毛佐家禮杼　山乎茂　入而毛不取

草深　執手母不見　秋山乃　木葉乎見而者　黃葉乎婆　取而曾思努布　青乎者　置而曾歎久

曾許之恨之　秋山吾者

（冬ごもり　春さり來れば　鳴かざりし　鳥も來なきぬ　咲かざりし　花も咲けれど　山を茂み

入りても取らず　草深み　取りても見ず　秋山の　木の葉を見では　紅葉をば　取りてぞしぬぶ　青きをば　措きてぞ歎く　そこしうらめし　秋山われは）

持統天皇

春過而　夏來良之　白妙能　衣乾有　天之香來山

（春過ぎて　夏きたるらし　しろたへの　衣ほしたり　天の香具山）

大伯皇女

吾勢枯乎　倭邊遣登　佐夜深而　鷄鳴露爾　吾立所霑之

（わがせこを　倭へやると　小夜ふけて　あかつき露に　我が立ちぬれし）

二人行杼　去過難寸　秋山乎　如何君之　獨越武

（二人行けど　行きすぎがたき　秋山を　いかでか君が　一人越ゆらむ）

元明天皇

大夫之　鞆乃音爲奈利　物部乃　大臣　楯立良思母

（ますらをの　鞆のおとすなり　ものゝふの　大前君（おほまへつきみ）　楯立つらしも）

大伴旅人（酒を讃する歌）

古之　七賢　人等毛　欲爲物者　酒西有良師

（古の　七の賢き　人どもも　ほりするものは　酒にしあるらし）

痛醜　賢良乎爲跡　酒不飲　人乎熟見者　猿二鴨似

（あな見にく　さかしらを爲（ゼ）と　酒のまぬ　人をよく見れば　猿にかも似る）

夜光　玉跡言十方　酒飲而　情乎遣爾　豈若目八目

（夜光る　珠といふとも　酒飲みて　心をやるに　豈しかめやも）

笠金持

萬代　見友將飽八　三吉野乃　多藝都河内之　大宮所

（萬代に　見ども飽かめや　三吉野の　瀧つ河内の　大宮所）

人皆乃　壽毛吾母　三吉野乃　多吉能床磐乃　常有沼鴨

（人皆の　命も我も　みよし野の　瀧の常磐（とこは）の　常ならぬかも）

作者知れざる歌

勝間田之　池者我知　蓮無　然言君之　鬚無如之

（勝間田の　池は我知る　蓮なし　しかいふ君の　鬚なきが如）（上一首――新田部親王に献れる）

足常　母養子　眉隱　隱在妹　見依鴨

（足乳根の　母がかふ子の　眉ごもり　こもれる妹を　みるよしもがも）

客人之　宿將爲野爾　宿降者　吾子羽裳　天乃鶴群

（旅人の　宿りせむ野（ぬ）に　霜ふらば　吾子はぐくめ　あめの鶴群（たづむら））

東歌

可須美爲流　布時能夜麻備爾　和我伎奈婆　伊豆知武吉氐加　伊毛我奈氣可牟
（霞居る　富士の山間に　わが來なば　いづち向きてか　妹がなげかむ）
安思我良能　波姑禰乃夜麻爾　安波麻吉氐　寳登波奈禮留乎　阿波奈久毛安夜志
（足柄の　箱根の山に　粟まきて　實とはなれるを　逢はなくも怪し）
多麻河泊爾　左良須氐豆久利　佐良左良爾　奈仁曾許能兒乃　己許太可奈之伎
（玉川に　さらす調布　さらさらに　何ぞこの女の　こゝだ愛しき）

以上は、極く簡單に、代表的と思はるゝ歌を數首擧げたに過ぎない。皆萬葉集のなかにある歌ばかりであるが、曩にも述べた如く四千餘首の歌は、今日もなほ吾々の心琴に觸れて、此の時代を憧憬せしむるものが多い。

萬葉集の研究には

北村季吟　萬葉拾穗抄
釋　契沖　萬葉代匠記
賀茂眞淵　萬葉考
本居宣長　萬葉集玉の小琴
橘　千蔭　萬葉集略解
富士谷御杖　萬葉集燈
橘　守部　萬葉集檜嬬手
同　萬葉集靈綱
鹿持雅澄　萬葉集古義
木村正辭　萬葉集美夫久志
井上通泰　萬葉集新考
豐田八十代　萬葉集新釋
次田　潤　萬葉集新講
折口信夫　口譯萬葉集
同　萬葉集辭典

佐々木信綱　萬葉集選釋
佐々木信綱　校本萬葉集
土岐哀果　作者別萬葉全集

などがある。

十、散文

奈良朝時代の散文は、歌謠に比べると、甚だ發達しない觀がある。これは、當時漢文が流行して、朝廷の記錄制令の類はいふまでもなく、庶民に告示する詔勅の類さへ全然漢文を以て書かれる傾向であつたから、特に國文を用ゐねばならぬ必要以外、大抵のものは漢文が用ゐられ、自然國文が等閑になつたのであらう。此の時代の散文には、

祝詞
宣命

國史
風土記
氏文

の類があつて、此の中で祝詞は前時代と大差がないから、その他のものに就いて、次に述べよう。

十一、宣命

當時漢文を以て綴つた詔勅に對して、國語を以て綴つた詔勅を宣命といふ。これは「續日本紀」のなかに多く載せられて居るが、持統天皇の朝以後に用ゐられたものである。上代の詔勅は國文のものが多かつたのであらうが、日本書紀を編む際に、皆漢文に綴り直されたのは殘念に思はれる。

祝詞は神前に告白する文、これは庶民に告布するの文、何れも對者をして感動せしむるを要するものであるから、對句、疊句、枕詞、などを用ひて、流麗雄大の風をな

した點は、よく相似た所がある。また、書き方も大體に於て祝詞や壽詞と同樣である。

元明天皇卽位の宣命

現つ御神と　大八洲國知ろしめす　倭根子天皇大命らまと　詔り給ふ大命を　うごなはれる親王たち　諸王諸臣　百の官人たち　天の下の公民　もろもろ聞しめさへと宣る

かけまくも畏き藤原の宮に　天の下しろしめしゝ　倭根子天皇の丁酉の八月に　この食國天の下の業を　日並知皇太子嫡子　今天の下知ろしめしつる　天皇に授け給ひて　並びまして　この天の下を治め給ひ　こゝのへ給ひき　是は掛卷も畏き　近江の大津の宮に　天の下知ろしめしし　大倭根子天皇の　天地と共に長く　日月と共に遠く　變るまじき常典と立て給ひ　布きたまへる法を　受けたまはりまして　行ひ給ふ事を　諸承りて　畏み仕へ奉らくと宣り給ふ大命を　諸聞しめさへと宣る

かく仕へ奉り侍るに　去年の十一月に　畏きかも　我王　朕が子天皇の詔り給ひつらく　朕御身勞らしくますが故に　暇得て御病治め給はむとす　此天津日嗣の位は　大命にませおほまして治め給ふべしと　讓り給ふ大命をうけたまはりまして　答へ申しつらく　朕は堪へじと辭び申して受けまさずある間に　たびまねく日重ねて　讓りたまへば　いとほしみ畏み　今年の六月十五日に大命は受け給ふと申しながら　此重位に繼ぎます事をなも　天地の心を勞しみ　重しみ　畏み　まさくとのり給ふ大命を　諸聞しめさへと宣る

故こゝをもて　親王等をはじめて　王臣　百の官人等の淨き明き心をもちて　いやつとめに　いやしまりにあななひ奉り　輔け奉らむ事に依りてし　此食國天下の政は　平けく長くあらむとなもおもほします　又天地のむた　長く遠く變るまじき常典と　立て給へる食國の法も　傾く事なく動く事なく　渡り行かむとなも　おもほしめさくと　宣り給ふ大命を　諸聞しめさへと宣る

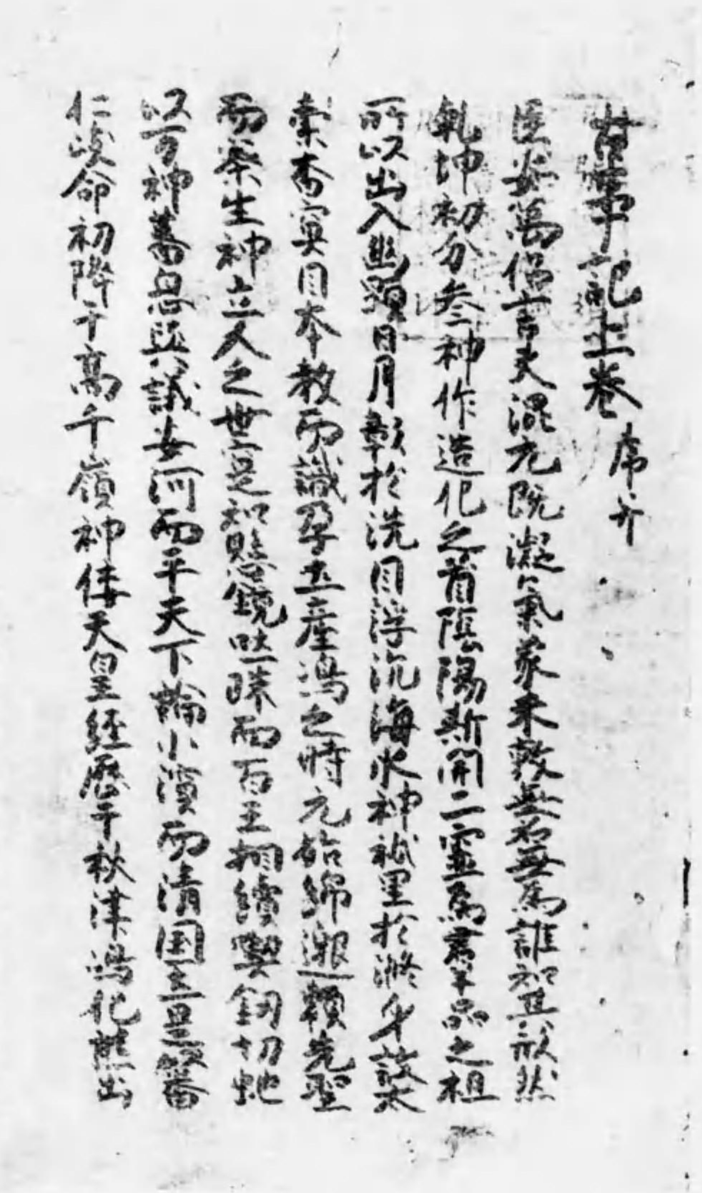
又遠皇祖の御代を始めて　天皇が御世御世　天つ日嗣と高御座にまして　此食國天の下を撫で給ひ　慈み給ふ事は　事だつにあらず　人の祖のおのが弱兒を養ひ治す事の如く　治め給ひいつくしみ給ひ　來る業となも神ながらおもほしめす　こゝを以て先づまづ　天の下の公民の上を　いつくしみ給はくと詔り給ふ　天皇が大命を　諸聞しめさへと宣る

十二、國史—古事記

わが國、修史の事業は、推古天皇の二十八年に聖德太子が蘇我馬子等と議つて、天皇紀、國紀及臣、連、伴造、百八十部並に公民等の本紀を、錄し給うた事があるが、今は全く亡んでわからない。

今日に傳へられたものは、まさに「古事記」で、天武天皇御卽位の十年に稗田阿禮をして皇位の繼承及び先代の舊事を口授せしめ給うたが、業半ばにして天武帝が崩ぜられた爲に、一時中止せられ、後、太安麻呂が阿禮の口授に基いて元明天皇の和銅五年に、勅に依つて撰進したものである。

その後八年を經て、養老四年に舍人親王は「日本書紀」を編まれたが、これは、「古事記」が純漢文でなかつた事を慨んで、特に漢文を用ゐられたのである。勿論、修史の體裁、記事の正確などに至つては、日本書紀の方がその體をなして居るのではあるが、國文學といふ立場から見る時は、古事記の價値は非常に重大なものとなる。日本書紀が歷史であるとすれば、古事記は文學であるといひたいのである。尠くとも古事



大須本、古事記上卷の首（古典保存會發行に據る）

記には、文學的要素が十分に含まれて居る。

特に最も注意せねばならぬのは、古事記にある神話の事である。神話はどこまでも神話で、歴史ではない。文學である。日本の神話は、もとより太陽神話が中心になつて、それに英雄神話が附隨して居るのであるが、この神話に殺戮などといふ、凡て殘忍性の事が少ないのは一の特長といふ事が出來よう。神話の事に關しては、太古の時代にいふべきであつたが、それが文字に綴られて文學となつてあらはれたのが、此の時代であるから、特にこゝに注意を促したのである。古事記は、曩にも度々說いた通り、安麻呂、阿禮の力になつたとはいふものゝ、その語りつぎいひ傳へた所は、實に國民全體のものであるから、特に神代の部分は一の國民詩――國民的作品――ともいふべきで、今日現存する我が邦の最古の書物であるといふ點、主として國語を以て綴られた點、記事最も卒直である點、などから、私はこの「古事記」が今日も國民的讀物として、廣く一般に讀まれる事を希望して止まぬのである。詞は日本語である、文字を除き去れば、吾々に最も親しい、わかり易い文章であるのは、一旦古事記を手にした人の必ず感ずる所であらう。その例としてこゝに須佐男命の一段を抄錄する。

故於是速須佐之男命　言　然者請二天照大御神一將レ罷　乃參二上天一時　山川悉動　國土皆震爾天照大御神聞驚而　詔下我那藝命之上來由者　必不二善心一　欲レ奪二我國一耳上　卽解二御髮一纏二御美豆羅一而　乃三於左右御美豆羅一　亦三於御髮一　亦三於左右御手一　各纏二持八尺勾璁之五百津之美須麻流之珠一而　曾毘良邇者　負二千入之靫一　附二五百入之靫一　亦所二取佩伊都之竹鞆一而弓腹振立而　堅庭者　於二向股一蹈那豆美　如二沫雪一蹶散而　伊都之男建蹈建而　待問　何故上來

（かれこゝに速須佐之男命　白し給はく　然らば天照大神に白して　罷りなむと白し給ひて　乃ち天に參上ります時に　山川ことごとに動み　國土みな震りき。

こゝに　天照大御神　聞き驚かして　あが那勢の命の上り來ます故は　必ず善はしき心ならじ我國をうばはんと思ほすにこそと　のり給ひて　卽ち御髮を解き　みみづらに纏かして　左右のみみづらにも　御髮にも　左右の御手にも　みな八尺の曲玉の　五百津の御統の珠を　纏

き持たして　背には　千入の靫を負ひ　五百入の靫を附け　又いつの高鞆を取り佩ばして　弓腹振り立てゝ　堅庭は　向股に踏みなづみ　沫雪なす　蹴ゑはらゝかして　いつの男たけび踏みたけびて　待ち問ひ給はく　なぞ上り來ませるぞ　問ひ給ひき）

また、有名な傳說「稻羽の白兎」の段は

八十神各稻羽の八上比賣を婚はむの心ありて　共に稻羽に行きける時に　大穴牟遲の神に俗を負せ　從者として率て往きき。こゝに氣多の前に到りける時に　裸なる兎伏せり。八十神その兎に云ひけらく　汝爲まくは　この海水を浴み風の吹くに當りて　高山の尾の上に伏してよといふ。かれ其の兎　八十神の敎ふるまゝにして伏しき。こゝにその鹽の乾くまにまに　其身の皮　ことごとに風に吹き裂かえしからに　痛みて泣伏せれば　最後に來ませる大穴牟遲神其兎を見て　なぞもいまし泣き伏せるぞと問ひ給ふに　兎白さく　あれ隱岐の島にありて　此國に渡らまく欲りつれども　渡らむよし無かりし故に　海の鰐を欺きて言ひけらく　吾といましと族の多き少きを比べてむ。かれ汝は　其族のありのことごと率て來て　此島より氣多の前まで　みな並み伏しわたれ。あれ、その上を踏みて走りつゝ數み渡らむ。こゝに我族と何れ多きといふことを知らむ。かくいひしかば　欺かえて列み伏せりし時に　吾其上を踏みて　數み渡り來て　地に下りむとする時に　吾　汝は吾に欺かえつと言ひをはれば　卽ちいやはてに伏せる鰐　我を捕へて　ことごとに我が表服を剝ぎき。此に因りて泣き患ひしかば　先だちていでましゝ八十神の命もちて　潮を浴みて風にあたりて伏せれと敎へたまひき　かれ敎のごとせしかば　我身ことごとにそこなはえつと白す　こゝに大穴牟遲神　その兎に敎へ給はく　今疾くこの水門に往きて　水もて汝が身を洗ひて　卽ち其の水門の蒲の花をとりて　敷き散して其の上にこい轉びてば　汝が身もとの如くにこと　必ずいえなむものぞと　敎へ給ひき。かれ敎のごとせしかば　其身もとの如くになりき　これ稻羽の素兎といふ者なり。

この二例に就いても、古事記は決して難讀なものとは云はれない。寧ろ、今日の國民に親しみ易い文章であるといふことが出來よう。

十三、風土記

風土記は、元明天皇の和銅六年、卽ち古事記が奉られた翌年、畿內及び七道に令し

て、各地の地誌と由來とを募られた事がある。その令に應じて、各地から產物の品目土地の沃埆、山川原野の名稱の由來、古來相傳の舊聞異事などを記して、獻じたものが各地の風土記である。古事記が中央政府を中心にした中央史であると見れば、風土記は各地方の地方志といふ事が出來よう。

これは、各國から奉つた筈であるから、數多くあつたに相違ないが、今はその多くが散佚してしまつて、

播磨風土記

が最も古いもの、次いでは常陸、出雲の風土記があり、丹後、肥前、豐後のものなども、ほゞ同時代の作であらうと思はれるが、皆その一部分が殘されてゐるのみで、完全なものとしては、前記の中出雲風土記一つあるのみである。

文體は各地各樣であるが、大體は漢文で、そのうち舊聞などを記した所は、國語そのまゝを寫したものがある。これは古事記の文體と同樣である。

出雲風土記國引の段

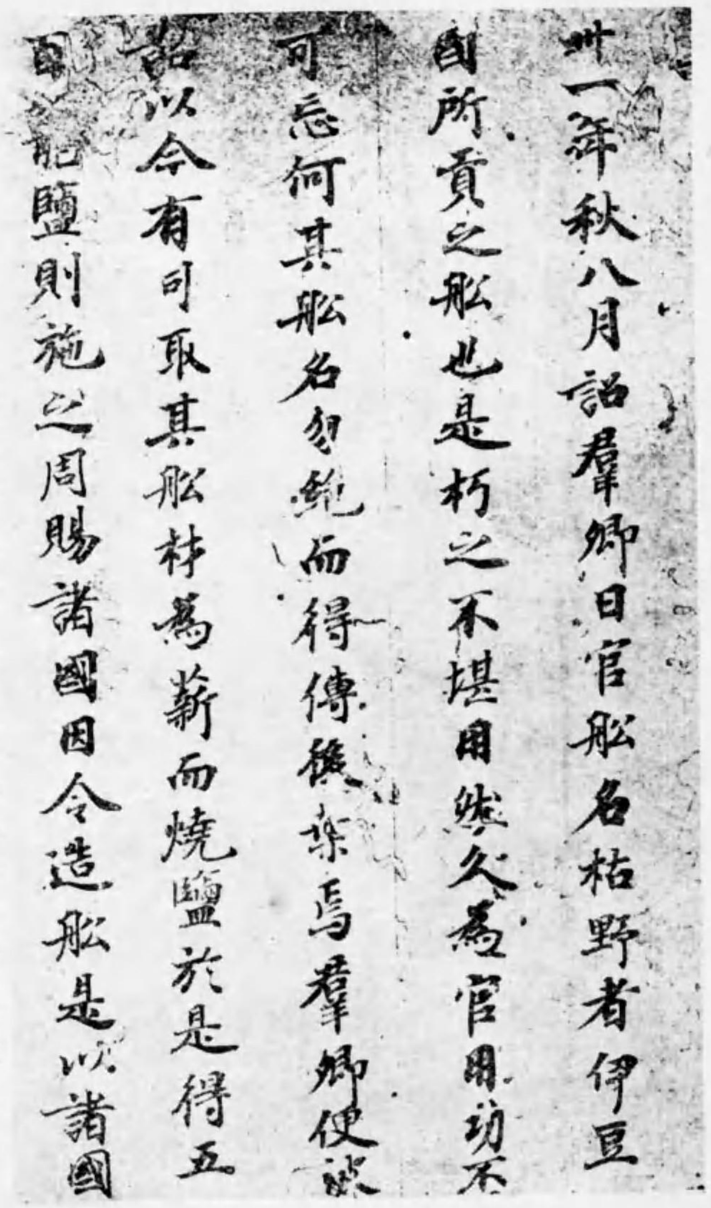
所二以號一二意宇一者　國引坐八束水臣津野命詔　八雲立出雲國者　狹布之薦國在哉　初國小所作故將二作縫一詔而　栲衾志羅紀乃三埼矣　國之餘有耶見者　國之餘有詔而　童女胸鉏所取而大魚之支太衝別而　波多須々支穗振別而　三自之綱打挂而　霜黑葛闐々耶々爾　河船之毛々曾曾呂々爾　國々來々　引來縫國者　自二去豆乃打絶一而　八穗米支豆支乃御埼也　此而堅立加志者　石見國與出雲國之堺有名佐比賣山是也　亦持引綱者　薗之長濱是也　（中略）　今者國引訖詔而　意宇杜爾御杖衝立而　意惠登詔　故云二意宇一意宇と名づくる故は　國引きませる　八束水臣津野の命の詔り給はく　八雲たつ出雲の國は狹布の薦國なるかも　初國小さく作らせり　かれ作り縫はんと　詔り給ひて　たくぶすま新羅のみ崎を　國の餘ありやと見れば　國のあまりありと詔りたまひて　童女の胸鉏ごらして　大魚のきだ衝き別けて　はたすすきほふり分けて　三よりの綱うちかけて　霜葛くるやくるやに河船のもそろもそろに　國來國來と　引き來縫へぬ國は　去豆の打絶より　八穗爾杵築のみ崎なり。かくて　かため立てし加志は　石見國と出雲國との堺なる　名は佐比賣山是なり。又持

ち引ける網は、薗の長濱是なり（中略）今は國引き訖へぬと　詔り給ひて　意宇（おう）の杜に　御杖（みつえ）立て、意惠（おえ）と詔りたまひき。かれ意宇といふ。

この國引の一段は、見方によつては、神功皇后の三韓征伐、豐臣秀吉の朝鮮征伐、近くは日清・日露・日獨の諸戰爭によつて、我が邦の領土が漸々に增加して行く事にもとれる。國を引寄せるといふ事は、餘つた土地を貰ふ事で、今日南洋の一部にさへ、旭の御旗が輝く有樣は、やはりこの古の國引の精神を體して、吾々が努力――國家の爲に――して居るのではあるまいか。

十四、氏　文

氏文は、一家族の歷史ともいふべきもので、祖先の功業から、家系を錄したものである。その書き方は、漢文の中に、まゝ國語を寫した假名を交へ、別に助辭を細書にした方法で、恰も「古事記」の文と宣命祝詞の書き方とを兼用した趣がある。これも數多くあつたものに相違ないが、今は高橋氏文といふものゝほか悉く散佚してしまつた。


卅一年秋八月詔羣卿曰官船名枯野者伊豆
國所貢之船也是朽之不堪用然久爲官用功不
可忘何其船名勿絶而得傳後葉焉羣卿使諮
詔以今有可取其船材爲薪而燒鹽於是得五
百船鹽則施之周賜諸國因令造船是以諸國

十五、當時の漢文

こゝに當時の漢文も、また日本の常用文學となつてゐたものであるから、所謂廣い意味の國文學史からは、全く除き去る事の出來ないものである。

日本書紀と懷風藻とは、文と詩とを代表する二編で、如何に日本人が、漢文を自由に使用したかを知る爲に、その文例を次に掲げて見よう。

日本紀　神代

古天地未レ剖。陰陽不レ分。渾沌如二鷄子一溟涬而含牙。及下其清陽者薄靡而爲レ天重濁者淹滯而爲上レ地。精妙之合搏易。重濁之凝場難。故先成而地後定。然後神聚生二其中焉一。

懷風藻

淡海朝大友皇子　五言　侍レ宴　一絶

皇明光二日月一　帝德載二天地一　三才並泰昌　萬國表二臣義一

大宰大貳正四位下紀朝臣男人　七言　遊二吉野川一

萬丈崇巖削成レ秀　千尋素濤逆折レ流　欲レ訪二鐘池越潭跡一　留連美稻一逢二槎洲一　美稻一作茅渟

從三位中納言兼中務卿石上朝臣乙麻呂

五言　怀夜閨情

他鄉頻夜夢　談與二麗人一同　寢裏歡如レ實　驚前恨泣レ寒　空思向二桂影一　獨坐聽二怀鳳一　山川嶮易路　展轉憶二閨中一

第四章　平安朝時代

一、時代の概觀

桓武天皇の延暦十三年の平安奠都――紀元一四五四年――から、後鳥羽天皇の文治二年に頼朝が總追捕使となつた――紀元一八四六――までの、凡そ四百年間が平安朝時代である。ところで、政治史の上には、奠都或は開幕を以て時代の變遷に區劃を立てる事が出來ようが、文藝方面の事は明らかに政治上の區劃と同一の變化をして行くわけでは無いのである。奈良の都を去つて、山城平安の京が創められたからといつても、文藝界の萬事が、土地と共に直ちに變動したのではない。但し、國民が周圍の所謂雰圍氣に依つて、政治上の變化と共に、趣味上感情上の變動を、漸次に進めたには相違ないのである。であるから、平安朝時代の文學として、その特長を發揮しはじめたのは、桓武・平城の二帝を過ぎた、嵯峨天皇の弘仁時代からはじまるものと見たい。

一言にして平安朝をいへば、これ泰平無事の時代。時に兵を動かす事が無かつたでもないが、それは極めて小さい事で、世は滔々として安逸遊墮に耽つてゐたといふことが出來よう。そして、四百年間安逸の最後は、源平二氏の爭鬪といふ事になつて世は修羅の巷と化し、流石に時めいた貴族の影も極めて薄いものとなつたのである。蓋し建國の當時、大帝神武天皇に從つて辛苦艱難、西九州の果から、中央の好位置大和を占むるに至る迄に、國民は幾多の辛い經驗を味つたのである。前に見た奈良朝以前及び奈良朝の時代は、まだ、この苦心爭鬪の影が消えなかつた。それで大伴物部の兩氏といはず、こぞつて武を練り刀を磨いたのである。それが、一旦この平安朝期に入ると、遠祖の武功は、たゞ遠い昔の思ひ出とのみなつてしまつて、劍はあれども金銀に輝き、鎧はあれども色彩られたものとなり了つたのである。この成り行きは恰も家康が千軍萬馬のうちに得た天下が、末に至つて或は犬公方を生み、或は腰拔武士が町人に辱かしめられるやうになつたのと、同じ經過をとつて居る。

圓滿な人格は、理性と感情との平靜調和になり立つものである。國家も亦これと同じく、國民の理性と感情とが整正調和した時が、最も圓滿な一國文化の發達を見る時でなければならぬ。これは、或は文武兩道の均等といふ事にもなるであらう。これを以て平安朝を通觀する時には、果してどんな感があるだらうか。

二、文事偏重と藤原氏

平安朝四百年の政治を左右し、國民を率ゐて、日本國を肩にして立つたものは、いふまでもなく藤原氏の一家一門である。抑、藤原氏といふ家は如何なる家柄であらうか。古來政治上に格別の勢力もなかつたこの家門が、鎌足に至つて急に名聲を擧げ、次で皇室との姻戚關係を生ずるに至るや、その威望は旭日の昇る勢で、遂には人もなげに打振舞ふ有樣に至つたのである。御堂關白道長の

このよをば　わがよとぞ思ふ　望月の　かけたる事も　なしと思へば

によつて考へても事態の大凡は察知する事が出來よう。しかもこの藤原氏は、古來文臣の家門である。かくの如き有樣で、一方に世は泰平無事といふ狀態である以上、世俗が一般に風流風雅の文事に奔るのは、當然の事であつたといはなければならぬ。大伴物部の兩氏は既に衰へ、源平兩氏の如きも、遠く都を去つて、地方にその勢を養うて居たのも、全く無理のない事である。

文事を後にし、武事を先にした風習は、建國以來武を以て起つた我が國の方針であつて、此の意味から云へば上下二千五百年、我が國は武事偏重の國家であると稱してもよいくらゐの國柄であるが、こゝ平安朝の世の中のみは、全く反對に文事を重んじて、理性は其の影をひそめ、感情がいたづらにたかぶつて、苟も歌文をよくしない者は、貴族の交をゆるさず、管絃を解せざる者は、宮廷に近よるべからずといふ有樣であつた。これには新都新政の、執つて以て則とした、支那唐朝の文化といふものも、また影響して居るには相違ない。唐時代の人材登用は、一に詩文にあつたのはいふに及ばず、全朝を通じて詩文萬能の時代と稱しても差支へはないのである。卽ち、此の

期に興隆した漢詩文の如きは、實に立派なもので、この漢文學と相並んで國文學もまた燦爛たる花を咲き匂はせたのである。

三、貴族社會

平安朝の社會は、後の鎌倉、室町、德川、の各時代を通じて、それが武士の社會であつた如く、これは全く宮廷を中心とする貴族の社會であつた。德川時代に至つて漸く町人――庶民――も、また文藝に遊び、文化の光に浴したのである。此の期間の地方庶民は、あれども無きが如き有樣で、政治も文敎も、貴族を離れては無かつたと云ひ得る。この勢力を有した貴族は、それなら果して如何なる生活を續けたものであらうか。

財政上には、地方に莊園を占有して、收入の增加を計り、宮廷に入つては、初のうちこそ他の部族もあつたが、後には、誰爭ふものもなくなつた爲に、同族相伐つを、これ事として、遂には叔姪相敵視し、兄弟墻に鬩ぐ有樣とさへなつたのである。大臣攝政關白は人臣榮達の最上である。而もこれを得るには、皇室の外戚となるより他に途がなかつたのである。卽ち當代の貴族は女兒を產む事が第一の要件であつて、これを後宮に入れるのが榮達の手段となるのであつた。娘を持つ親は爭うて女御更衣に進め、なんとかして權勢を得んものと競うた、これは當時の物語小說乃至歷史にさへ描かれて居る。

人力を以て盡すべからざるを願ふからには、勢ひ神佛の加護へと進むのは人情の常であるから、三世因果の宿命說にかられて、こゝに又加持祈禱といふ事が流行した。これを以て見ても、如何にその日常生活が優柔墮弱であつて、少しも剛健勇壯の風が無かつたかといふ事は了解出來るであらう。

四、女流文學者

前述の次第に依つて、後宮の勢力といふものが、此の世の中に非常な位置を占めた事は、想像に難くあるまい。一方、文事を以て人材の計器としたのであるから、才媛

は殿上に奔つて、己が仕ふる女御に光彩を放たしめんとした。紫式部と清少納言とは既に誰もが知る所で、世はたゞ花やかな櫻花の滿開に醉うて、その散るの早き夕を知らなかつた狀態である。女子は一般に情にもろく、涙に早い缺點があるが、かく女流文學者の榮えた、平安朝の世の中は、貴族社會をこぞつて、恰もこの風潮に乘せられたかの觀がある。

國文學史を通じて、平安朝期の前後にも、男子をして後に瞠若たらしめたやうな才媛も無いではないが、特に此の期に於てはそれが著しく、平安朝の文學は女流の文學であると極言しても、さして過言ではないのである。

五、平安朝の文學

漢文の隆盛は、前代から引續いて此の期に及び、嵯峨天皇の弘仁期の如きは、正に漢文隆盛の極致であつたが、醍醐天皇の朝に遣唐使が廢せられるに及んでは、在來の唐土心醉の熱は漸次さめかゝつて來て、一方この反動として國文學は非常な勢を以て發達するに至つたのである。

當代の文學としては、散文には、

物語　隨筆　日記　紀行

の如きもの、韻文には、和歌はもとより、

今樣　神樂歌　催馬樂

のやうなものも生れ出た。その內容に至つては、よく融合調和されて豐富になつて來た文學に、儒佛二敎の主義が面白くあらはれて居る。外國語の影響は、自然國語の音韻或は組織の上に、多少の變化を及ぼして、これを前期奈良朝に比すれば、更に複雜の度を高めたものがある。片假名は前期の末に發明せられたのであるが、こゝにまた平假名が生れて、益々國文の上に便宜を重ねるに至つた。卽ち、此の時代旣に、全く假名のみを以て綴つた、純粹の日本文學が生れた事は、特に注意すべき事である。そして平假名の發明は「かながき」の美を生んで、平安朝若しくはそれに近い時代には

「假名書き」の名手を澤山今日から見る事が出來る。

六、歌　謠

曩にも述べたやうに、嵯峨天皇の弘仁年間を中心として、漢文學は隆盛を極め、その結果として國文は一時影をひそめたやうに見えたが、その反動として次の時代たる清和天皇の頃から、韻文、特に和歌に於てその復興を見るに至つた。これは全く漢文崇拜に對する國民自覺の結果に外ならぬのである。

此の時に出た歌人には

僧遍昭　文屋康秀　僧喜撰　小野小町　在原業平　大伴黒主

などが有名で、これは所謂六歌仙と稱せられる人々である。

次で宇多天皇の寛平頃からは、益々和歌の道が興隆して、貴族の子弟、後宮の才媛、みな和歌を詠じ、月雪の詠を樂しんだものである。ついで、これらの人々の間に、遊戯的の諷詠が行はるゝに至つて、題詠――題を出して、その題のもとに歌を詠ずること――が流行し、轉じて歌會――當時は「歌合」というたやうである――が催されて遂には「判」――優劣を決すること――が起り、上古の歌謠のやうに、事物に觸れてその實感を詠ずるといふ分子が尠くなるに到つた。古歌の雄壯質實は、やはりその生活から來るので、此の時代の歌が、何となく纖弱華麗に見えるのは自然の勢である事はいふ迄もない。

題詠といふ事は、萬葉集時代には極めて、尠かつた事であるが、此の時代以後の風習は、今日にまで及んで居る。歌人等が相集つて題を出し、こゝに卽興の歌を詠ずるといふ事は、それによつて必ずしも名吟を得られないといふ事にはならぬが、しかし直接に風物に接して、其所に情緒のあらはれるものに比して、文學的價値は、果してどれだけあらうか。後には「歌人は居ながらにして、名所を知る」と誇つた事さへあるが、實感と、想像空想の感覺とは到底全然別箇のものであらう。

さて、醍醐天皇の延喜時代に及んでは、益々和歌が盛になつて、天皇も亦此の道に

深く御心を傾けさせられ、こゝにはじめて勅撰集といふものが、出來たのである。「古今和歌集」がそれである。次で、村上天皇は「和歌所」といふものを、禁中の梨壺に設けさせられ、時の歌人を集めて萬葉集の研究をせしめられた。また同時に同じく勅命を以て「後撰和歌集」を撰ばしめられ、これらがもとゝなつて宮廷と和歌との間に離るべからざる關係が生じ、この以後この期に勅撰集の編まれたものは五部に及んだのである。

かくの如く、和歌は非常な勢を以て、平安朝の貴族社會に流行したのであるが、これと同時にその流行はまた一面に範疇と束縛とを招いて、歌の方式といふものが、やかましく云はれるやうになつて來た。これは、所謂「歌學」「歌論」である。上古は人も詞も素樸であつたから、其所に方式の必要がなかつたのであるが、世の中が複雜になり、人智が多樣に亘るに從つて、段々と或意味の束縛が加へられるのは必然である。平安朝の貴族が、その勢力爭の爲に黨同伐異を事としたと同樣に、和歌の上にも、また各門戸を立てゝ、他人の入るを好まない風を生じたのである。これが甚しきに至つては、遂に和歌は、或一種の模型に從つて作り出される機械的技術に近いものとなつてしまつた、といへばいはれぬ事もない。

藤原公任　新撰髓腦　和歌九品
源俊頼　無名抄
藤原基俊　悅目抄
藤原清輔　奥儀抄　袋草子

などは、この期に出來た和歌の形式を論じたものである。

なほ、この隆盛を極めた和歌――短歌――三十一文字――のほかに、異體の歌が生れて來た。それは、

旋頭歌　連歌　今樣
神樂歌　催馬樂　朗詠

などといふもので、旋頭歌は五七七、五七七の調からなり、連歌は短歌一首の上下句いづれかを或人が詠めば、次の句を他の人が添へ加へたもので、今様は、七五音の聯句四節からなるものである。すでに今様といふのであるから、その名から考へても、舊態を破つて新しい試をなしたといふ事であつたのであらう。

神樂歌は、神祇を祝ふ爲に歌うたもの。催馬樂は、俗謠を唐樂の譜節に合せて謠うたもの、朗詠は、詩賦に曲節をつけて吟じたものである。これらは音樂を主としたもので、たまたまその文字が殘つたものであるから、所謂歌曲といふもので、催馬樂、朗詠、今様は當時これを總稱して郢曲とも唱歌とも云うた。

今その數例を示せば

催馬樂

飛鳥井に　飛鳥井に　宿りはすべし　影もよし　御水も清し　御馬秣もよし
伊勢の海の　伊勢の海の　清き渚の　潮干に　莫告藻や摘まむ　貝や拾はむ　玉や拾はむ

我家は　幄帳をも　垂れたるを　大君來ませ　聟にせむ　御肴に　何善けむ　鰒　榮螺　甲贏
善けむ　鰒榮螺　甲贏よけむ

今　様

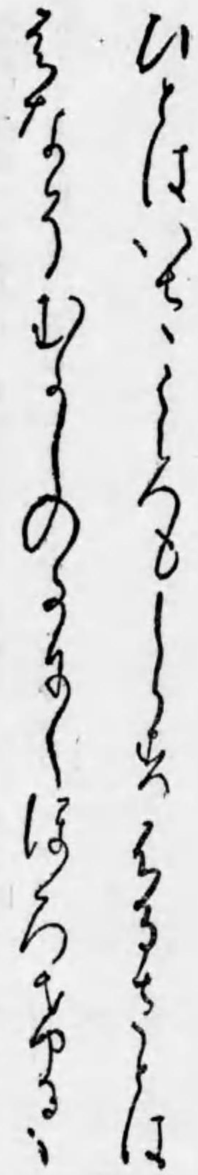
蓬來山には　千歳ふる　萬歳千秋　重なれり　松の枝には　鶴巣くひ　巖の上には　龜遊ぶ。
古き都を　來てみれば　淺茅が原ぞ　なれりける　月の光は　くまなくて　あき風のみぞ
身にはしむ。

七、古今集

醍醐天皇の延喜五年（紀元一五六五）勅を奉じて、紀貫之　紀友則　凡河内躬恒　壬生忠岑等が撰んだのが古今和歌集であつて、萬葉集に入らなかつた古歌と、その以後の名歌及び編者等の自詠などが載せられてある。全部二十卷。四季　賀　離別　羇旅　物名　戀　哀傷　長歌　旋頭歌　俳諧歌　などに分類せられ、歌の總數は千百首ある。

集を通じていふべき事は、萬葉集に比して儒佛二教の思想がよく融合せられて、殆どそれが日本化した樣にあらはれて居る事と、雪月花の風物を主とし、若しくは男女間の戀愛を抒べたものゝ多い事である。

花を見てその散り易きを感じ、月を見て無常を歎くといふのは、まさに佛教から來た因果宿命の感念に生れたもので、これは今日までも、わが國民性のなかに深く入り込んで居る思想である。戀歌は、當時貴族の男子が自由奔放な生活をした當然の產物



紀貫之筆高野切（古今集）

で、當時の男女間の關係は、到底今日のやうに整然たるものではなかつたのである。理性から來る人間生活の節制、社會の制裁は、勿論現今ほど發達もして居なかつたであらうし、またそんなものは、所謂權力のもとに、しひたげられて居たのである。婚姻の形式などが、今日と甚しく異つてゐる點、女子の男子に對して持つ感想信念の相違、いづれも、女子をして戀の切なきを喞たしめるに十分であつたやうである。

古今集中の歌人は、その數が非常に多いのであるが、中に有名な人々を擧ぐればかの六歌仙をはじめとして、

在原行平　素性法師　伊勢

などが出色の人物であり、なほ四人の撰者もまた名歌の作者である。然し乍ら、これらの中で、最も傑出した人をもとむれば、それは在原業平と紀貫之との二人であらう。

古今集を讀むについて參考とすべきものは、

僧　契　沖　　古今餘材抄

賀茂眞淵　古今集打聽
本居宣長　古今集遠鏡
香川景樹　古今集正義

近時のものとしては

中村秋香　古今集詳解
金子元臣　古今集評釋
佐々木信綱　古今集新釋

などがある。

八、在原業平

業平は平城天皇の皇子、阿保親王の第五子、母は桓武天皇の皇女伊登内親王で、兄行平と共に在原の姓を賜つて人臣の列に降つたのである。官に仕へて近衛權中將に進んだから、在五中將ともいふ。當時藤原氏の一門は榮えに榮えて、自餘の門族はみなその後塵を拜するに過ぎないといふ有樣であつたから、王家の出たる業平兄弟すら、

常に轗軻不遇に過ざるを得なかつたのであつた。

殊に業平は、その妻女の姻戚にあたる惟喬親王が文德天皇の第一皇子であらせられるにも係らず、皇儲の位にも立ち給はずして、洛北小野の山莊にわび住ひをして居られるのを見ては、多情多恨、感激に富める業平の性質として、同情の念やみがたく、心はいつも欝々として居たに相違ない。後世、業平としいへば、すぐにのつぺりとした色白の美男子を想像させるやうにもなつて居るが、實は彼は單なる一風流貴公子ではなかつた。寧ろ世俗の浮華輕佻に流れてゆくのを慨するのあまり、皮肉の行動に出たものであらうとさへ想像せられるのである。

業平の歌は、全く天成の麗句であつて、苦心もいらず練磨もなく、天眞の流露にまかせて、感ずるまゝに歌ひ出したものである。であるから、一面には「心餘りて詞足らず」と評さるゝ點もあらう。然し、餘韻深く、艶麗の想は、實に何人も大詩人を以て許すに異論はあるまい。

伊勢物語は、その名、物語といふにとらはれて、小說とのみ思はるゝ向もあるが、實は歌物語であつて、世相に感じて咏んだ彼の詠は、自然に物語の體をなしたといふ事が出來る。業平の歌を知らうとする人は、先づ伊勢物語を繙く必要がある。

その註釋書には

北村季吟　伊勢物語拾穗抄
賀茂眞淵　伊勢物語古意
藤井高尙　伊勢物語新釋
今泉定介　伊勢物語講義
窪田通治　評釋伊勢物語
鎌田正憲　伊勢物語詳解

などがある。

こゝに業平の歌數首を掲げよう。

月やあらぬ　春や昔の　春ならぬ　我身ひとつは　もとの身にして

飽かなくに　まだきも月の　かくるゝか　山の端にげて　入れずもあらなむ

人知れぬ　我が通路の　關守は　よひよひごとに　うちもねななむ

世の中に　たえて櫻の　なかりせば　春の心は　のどけからまし

思ふ事　いはでぞたゞに　やみぬべき　我とひとしき　人しなければ

いとゞしく　過ぎにしかたの　戀しきに　うらやましくも　かへる波かな

忘れては　夢かとぞ思ふ　思ひきや　雪ふみわけて　君を見んとは（惟喬親王を小野にたづねて）

名にしおはゞ　いざことはむ　都鳥　わが思ふ人は　ありやなしやと

九、紀貫之

父は望行、祖父は長谷雄。歌人と學著との家に生れて、延喜中、越前少掾御書所預となり、後土佐守に進んだ事は、その著「土佐日記」に見えて居る。木工權頭に昇つて從四位下に叙せられ、天慶九年に生を卒つた。

貫之の性質は、才氣煥發といふよりは、むしろ孜々として止まずといふ方であつた

らしく思はれる。その作歌の態度は、一句一語も推敲熟慮を經なければ發表出來ないといふ有樣で、つとめて想と詞とを合致せしめた跡が見える。これらは、業平の自由奔放なのとは全く正反對で、貫之は穩健雅正を特長とし、業平には天眞爛漫を大とせねばなるまい。

貫之の歌道に對する抱負は、有名な古今集の序文に十分あらはれて居る。

今の世の中、色につき、人の心花になりにけるより、あだなる歌、はかなきことのみ出でくれば、色好みの家に、埋木の人知れぬこととゝなりて、まめなる所には、花薄ほに出すべきことにもあらずなりにたり。その始を思へば、かゝるべくなむあらぬ。

というて、歌の本旨をほのめかし、當代の墮落を慨して、

歌とのみ思ひて、そのさま知らぬなるべし。

というて居るのは、謹嚴の態度を以て、歌道興隆を希うたものである。なほこの序文は、後にこれを抄錄するとして、こゝには彼の作歌數首を掲げよう。

人はいさ　心も知らず　ふるさとは　花ぞむかしの　香ににほひける
逢坂の　關の清水に　かげ見えて　今や曳くらむ　望月の駒
青柳の　糸よりかくる　春しもぞ　亂れて花の　ほころびにける
川風の　涼しくもあるか　打ちよする　なみと共にや　秋はたつらむ
結ぶ手の　雫に濁る　山の井の　あかでも人に　別れぬるかな
あふ事は　雲井はるかに　なる神の　音にきゝつゝ　戀ひわたるかな
明日知らぬ　我身と思へど　暮れぬ間の　けふは人こそ　かなしかりけれ
訪ふ人も　なき宿なれど　來る春は　八重葎にも　さはらざりけり
櫻ちる　木の下風は　寒からで　空にしられぬ　雪ぞふりける

これらを讀めば、直ちに業平と貫之との性格の相違が感得せられるであらう。又、前期奈良朝時代の詠に比べて、歌詞が著しく優美になつた事も考へられる。

十、他の諸家

古今集の作者としては、以上述べて來た業平と貫之との外に、業平に對するものとしては僧遍昭があり、貫之に對するものとしては凡河内躬恒があり、なほ女流作家として小野小町があつて光彩を放つてゐる。

(一)僧遍昭　は俗名を良峰宗貞といひ、桓武天皇の皇孫である。仁明天皇に仕へたが、その崩御の後哀痛に堪へず、遂に叡山に入つて剃髪した。その歌は構想複雑で曲折を極め、文辭亦甚だ技巧に富んでゐる。業平の純眞に對して、これはまさにその反對の立場にあるものである。

(二)小野小町　の傳記は詳かでない。その歌は婉麗で纖弱、いかにも女性らしい調べをもつてゐる。感受性に富んで、感興のわくがまゝに、しかも平易な詞を以て歌ひ出したところは、貫之の所謂「あはれなるやうにて強からず、いはゞよき女のなやめるところあるに似たり」といふ評につきて居る。

(三)凡河内躬恒　は寛平年間に甲斐權少目となり、後年和泉權掾となつた。古今集の撰者としては貫之と並び、その詠は多く客觀的で特に叙景の歌に於てすぐれて居る。歌の體、新味を帶びて、當時にはまだあまり試みられなかつた「名詞止め」の形式をとつたものが少くない、これらは千載、新古今への動きと見ることは出來ないだらうか。

此の外なほ多士濟々、擧げれば限りなくあるが、次に作例をあげ、それによつて當時の歌風の大凡を窺ふことゝする。

僧遍照

花の色は　霞にこめて　見えずとも　香をだにぬすめ　春の山風
淺みどり　糸よりかけて　白露を　玉にもぬける　春のやなぎか
はちすばの　濁にしまぬ　心もて　何かは露を　玉とあざむく

小野小町

花の色は　うつりにけりな　いたづらに　わが身世に經る　ながめせしまに
うたゝねに　戀しき人を　見てしより　夢てふものは　たのみそめてき

色見えて　移ろうものは　世の中の　人の心の　花にぞありける

在業行平

立ちわかれ　いなばの山の　みねに生ふる　まつとしきかば　今かへりこむ

わくらはに　とふ人あらば　須磨の浦に　藻しほたれつゝ　わぶと答へよ

菅原道眞

東風吹かば　にほひおこせよ　梅の花　あるじなしとて　春を忘るな

君が住む　宿の梢を　行くゆくも　かくるゝまでに　かへり見しはや

海ならず　たゞよふ水の　底までも　清き心は　月ぞ照らさむ

凡河内躬恒

憂きことを　思ひつらねて　かりがねの　なきこそわたれ　秋の夜な夜な

いも安く　ねられざりけり　春の夜は　花のちるのみ　夢に見えつゝ

壬生忠岑

久方の　月のかつらも　秋はなほ　紅葉すればや　てりまさるらむ

山里は　秋こそことに　わびしけれ　鹿のなくねに　目をさましつゝ

松の音に　風の調を　まかせては　龍田姫こそ　秋はひくらし

紀友則

君ならで　誰にか見せむ　梅の花　色をも香をも　知る人ぞしる

久方の　光のどけき　春の日に　しづ心なく　花の散るらむ

五月雨に　もの思ひをれば　郭公　夜ふかくなきて　いづち行らむ

伊勢

見る人も　なき山里の　櫻花　ほかのちりなん　後に咲かまし

十一、古今集以後

古今集の撰は、たしかに和歌の興隆促進の氣運を助長したといふべきで、その後これにならつて勅撰の和歌集は續々と撰ばるゝに至つた。今この期間に出來た勅撰集と

その撰者とを掲げると、

後撰集（源順・大中臣能宣・清原元輔・紀時文・坂上望城）
拾遺集（藤原公任）
後拾遺集（藤原通俊）
金葉集（源俊頼）
詞花集（藤原顯輔）
千載集（藤原俊成）

である。右のうち古今・後撰・拾遺の三集を呼んで「三代集」といひ、これに後拾遺以下の四集、及び次期のはじめに成つた新古今集を加へて「八代集」と稱する。

（一）後撰集　は古今集の撰後四十六年を經た、村上天皇の天暦五年に撰ばれたもので、天皇が源順等を召され、萬葉集の研究をなさしめられた序に出來たものである。古今集と同樣二十卷で、部門もほゞ同樣である。その內容は、古今集に漏れたもの及び古今集以後のものを撰び集めたもので、作者もほゞ古今と相似て居るが、この集は、撰擇の主旨として、歌の姿、卽ち歌詞の整調に重きを置くといふよりも、心卽ち思想——藝術的——を本とした爲に、體裁は古今集ほど整然たるものがない。

（二）拾遺集　これは一條天皇の朝に、藤原公任が撰んだものと傳へられて居る。撰擇の方針は、歌詞を主とした所、古今集に倣うたのであらうが、而も到底古今集には及ばない。古今、後撰に遺れるを拾ふの義を以て名としたのである。

其他の勅撰集は、何れも大同小異、特にいふべき節もない。すべてこれ、やがて生れ出るべき新古今集への過程にあるもの、たゞ後の金葉、詞華、の兩集は、ちよつと特長を帶びてゐて、これを概評すれば纖巧かつ中正を得たものが多いと云へよう。撰集の體裁も、作歌の內容も、要するにその時代と共に、たゞ舊態を墨守するに止つたのは、止むを得ぬ自然の勢で、次期の新古今集に新人が旗を飜して起つに至る迄は、たゞ暗中に蠢動しつゝあつた狀態である。

古今集以後の期に於ける勅撰集關係の歌人で、特に記すべき人々は

曾根好忠　藤原公任　源俊頼　藤原俊成

の四家であらう。なほこのほかに當時の歌人としては

大中臣能宣　源順　平兼盛　清原元輔　源經信　大江匡房　藤原顯輔　藤原基俊
源頼政　紫式部　清少納言　和泉式部　赤染衞門　相模　大貳三位　平忠度　西
行法師

などがある。

十二、好忠　公任　俊頼　俊成

(一)好忠　は官位も卑く、性狷介、しかも歌壇の革新者を以て自任し、自ら高うして人を容れず、ためにまた世の容るゝ所とならず一生を不遇に終つたが、その作歌の上には因襲と形式とを打破して清新の氣を求めようとしたあまり、取材用語手法に、蒼古、珍奇なものを採り入れ過ぎた感がある。勿論時流に背いた結果として、その報いられた所はたゞ嘲笑に過ぎなかつたのであるが、その志は後の經信、俊頼父子によつて繼承せられ、ひいては新古今への道程をたどる素をなしたものと見ることが出來る。

みしま江に　つのぐみわたる　蘆の根の　一夜のほどに　春めきにけり
山城の　鳥羽田の面を　見わたせば　ほのかに今朝ぞ　秋風は吹く
荒小田の　去年の古根の　ふるよもぎ　今を春べと　ひこばへにけり

(二)公任　は小野宮太政大臣藤原實頼の孫で、世に四條大納言と呼ばれた。學、和漢にわたり、諸藝として通ぜざるはなく、殊にその筆跡の妙は、今もなほ渇仰の中心となつて居る。歌風は穩健優雅、みやびたる大宮人の典型を窺はしめるものがある。しかし彼の長所は歌才よりもその評論にあつた。貫之の主義を承けて更に深く一歩を進めて居る事は「新撰髓腦」及び「和歌九品」によつて窺ふことが出來る。

春來てぞ　人もとひける　山里は　花こそ宿の　主なりけれ
こゝに消え　かしこに結ぶ　水の沫の　うき世に住める　身にこそありけれ

(三)俊頼　は公任と同時代の源經信の子、資性寛濶、頗る多藝多才の人で、堀河・鳥羽・崇德の三帝に歴仕して從四位上右近衛少將まで進んだ。父經信の試みた新體を大成したのは彼で、その主唱したところは前代の好忠の唱へたと意を一にしたものであるがしかも時代の要求に巧みに投合したところはその特長と見なければならぬ。しかしその詠歌に於ては苦吟の人で、熟考又熟考、改刪又改刪、而して後はじめて人に示したといふ事である。着想新奇、歌詞頗る溫雅との評があるのは、蓋しよく當つて居る。

世の中は　うき身に添へる　影なれや　思ひすつれど　はなれざりけり

鶉なく　眞野の入江の　濱風に　尾花なみよる　秋の夕ぐれ

(四)俊成　は御堂關白道長四世の孫で、皇太后大夫まで進み、後剃髪して釋阿と號した。彼は多少覇氣もあつた人で、當時――平安朝末期――の歌壇は、全く形式にとらはれて、一方にあくまで舊套を守らうとするものがある中に、一脈清新の氣風が動き、しかも兩々相混亂して據る所を知らなかつた觀がある。又時代は院政久しきにわたつて、次の源平兩氏の革新の旗風がまさに靡かんとする時であつたから、その師基俊の定めた舊例古格を守つては居るものゝ、全くこれに泥む事をせず、一面には新しい調を叫んで、よく兩派の長を採り、紛亂を一擧にして鎮定し終つた快腕はまた偉なりとせねばならぬ。彼は九十の長壽を保ち、一代の先達として、はた天下の判者として、世の尊信を一身に集めたのは、まことに歌壇の壯觀であつた。

過ぎぬるか　夜半の寢醒の　ほゝゝぎす　聲は枕に　ある心地して

浦つたふ　磯のゝまやの　櫂枕　聞きもならはぬ　波の音かな

まれに來る　夜半もさびしき　松風を　たえずや苔の　下にきくらむ

昔思ふ　草の庵の　夜の雨に　なみだな添へそ　山ほとゝぎす

十三、女流歌人――和泉式部

好忠・公任・俊頼・俊成のほかにも、なほ優れた名家がないではないが、前に述べた通り大同小異の趣があるから、これらは略して、こゝには女流歌人の代表として和泉

式部について述べよう。

和泉式部は越前守大江雅致の女、和泉守橘道貞の妻となつて小式部を生み、後、一條天皇の中宮上東門院に仕へ、更に丹後守藤原保昌の妻となつた。才色雙絶、多感多情、實に平安朝女子の特質を一身に有してゐたといふ事が出來る。その歌は自由奔放感情の激するまゝに詠み出したもので、實に成るがまゝにして成つたものである。所謂天成の歌人で、此の點は頗る業平に似た所が多い。女流としては小町に似て更に强く、その詠ずるところ、抒情歌――戀歌――に於て特に秀れたものが多い。

その他の女流作家については次の作例によつて一斑を見ることゝする。

和泉式部

春霞　立つや遲きと　山河の　岩間をたゝく　音きこゆなり

いかにせむ　いかにかすべき　世の中は　背けば悲し　住めば住みうし

暗きより　暗き道にぞ　入りぬべき　はるかにてらせ　山の端の月

赤染衞門

歸る雁　雲井遙かに　なりぬなり　又來る秋も　遠しと思ふに

かはらむと　祈る命は　をしからで　さてもわかれむ　事ぞかなしき

紫式部

世の中を　なに歎かまし　山櫻　花見るほどの　心なりせば

ほゝゝぎす　聲まつほどは　片岡の　森の雫に　立ちやぬれまし

清少納言

夜をこめて　鳥の空音は　はかるとも　世に逢坂の　關はゆるさじ

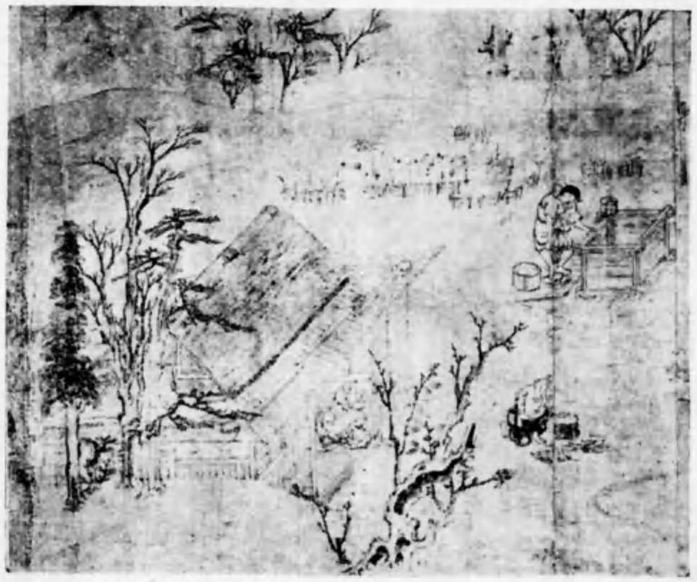
よしさらば　つらきは我に　習ひけり　たのめて來ぬは　誰か敎へし

十四、西行法師

この頃社會の思想界に變動が少なかつた爲に、歌風に於てもとかく新奇の趣があらはれかねてゐた事は、曩に述べた通りであるが、これ迄に論じ來つた諸家は、何れも

その時代の風潮に左右せられて、たゞ纔かに、形式上、纖細の技を弄し、華麗の調を成したといふに過ぎない。それは同じ時勢に同じ宮殿を中心とした生活の、なす所である。然るに、こゝに全くこれらの人と生活を異にし、物に感じては赤心を吐露し、事に感じては自由自在な詩才を發揮した僧西行がある。西行は俗名を佐藤憲清といひ、もと武門の人、後鳥羽上皇に仕へて北面の武士となり、上皇の寵を受けたが世をはかなんで出家し、風月を友として、四方を周遊した。これ既に平安京の小山川に想をやつて居つた堂上者流と異る所で、その天禀の才は、佛敎の素養と相應じて、その詠吟は實に深邃のものがある。西行の家集を「山家集」――異本山家集がある――といふが、これを繙けば、世俗を脱した西行の性行は、よく窺はれるのである。然しながら、西行はもと所謂當時の歌匠ではない。師匠として立つ心は毛頭無かつたのであるから、推敲練磨などゝいふ事は、全く顧みなかつたのである。吾々は「山家集」を讀んで、時に思はず感吟せしめらるゝものがあると同時に、また頗る平調凡作のものも混淆して

西行物語（繪卷）の一部



（德川義親侯の所藏に據る）

居るのを感ずる。

ねがはくば　花のもとにて　春死なむ　そのきさらぎの　望月の頃

吉野山　去年のしをりの　道かへて　まだ見ぬかたの　花を尋ねむ

吉野山　やがていでじと　思ふ身を　花ちりなばと　人や待つらむ

眞菅生ふる　山田に水を　まかすれば　うれしがほにも　鳴く蛙かな

心なき　身にもあはれは　しられけり　鴫立澤の　秋の夕暮

さびしさに　絶えたる人の　またもあれば　庵ならべむ　冬の山里

津の國の　難波の春は　夢なれや　あしのかれ葉に　風わたるなり
道のべの　清水流る、　柳陰　しばしとてこそ　立ちとまりつれ

十五、散　文

平安朝の散文と見るべきものゝ種類は、

物語　歌序　日記　紀行　隨筆　雜史

に盡きる。漢學の奬勵が止んで、假名の流行が廣くなつた平安朝の中期前後は、まさに國文隆盛の時期である。我が國の文章、我が國の文體といふものは、此の時に至つて、はじめて整然たる一體を成したと云うても差支へあるまい。

文體の整理といふ事は、難事業である。論難提議、何れも多少の效果はあらうが、而も歸結する所は、常に文學者――作家――その人の文にあるのである。明治の初葉はやく言文一致論が叫ばれたが、これを大成したのは學者でも政治家でもない。實に小說家の手に成つたのである。恰もこれと同樣に、奈良朝以來混沌たる有樣にあつた文脈は、まさに平安朝一流の作家の手によつて、一千年來用ゐられた和文、そのものを成就せしめたのであらう。

物語には、多くの大作があるが、うちに最も有名なものは紫式部の作と稱する源氏物語である。

歌序の筆者としては、古今集序の貫之の筆に優るものはない。

日記の作者としては土佐日記の貫之。更科日記の菅原孝標の女。紫式部日記の式部。蜻蛉日記の道綱の母。和泉式部日記の式部。

隨筆としては、枕の草子の清少納言。

雜史の著者としては、榮花物語の赤染衞門、大鏡の藤原爲業、などは、平安朝の國文――散文――を論ずる場合に忘れてならぬ人々である。

十六、物　語

物語のうち、最も古いものは、竹取物語であつて、これは、空想を奔せた假作の物

語として、神話以來はじめての產物である。竹取物語の大意は、皇族大臣などが、竹の中から生れた月界からの一美女かぐや姫を娶らうとして、奔走苦心する有樣を描いたもので、滑稽の分子も多く、漢籍・佛典から得た文辭構想もまた少くない。但しこの時代の物語のうちでは、行文最も簡素。その出來た時代も作者も共に全く不明であるが、初期の產物である事は疑ひない。其の一節は

日暮れぬれば、かの寮におはして見給ふに、まことに燕、巢作れり。くらつ麿申すやうに、尾をさゝげて廻るに、荒籠に人を載せて、釣り上げさせて、燕の巢に手をさし入れさせて探るに、物もなしと申すに、中納言、惡しく探ればなきなりと腹立ちて、誰ばかりおぼえんにて、われ上りて探らむと宣ひて、籠に入りて、上りて窺ひ給へるに、燕、尾をさゝげていたく廻るに合せて、手をさゝげて探り給ふに、手にひらめるものさはる時に、われ物握りたり。今はおろしてよ。翁しえたりと宣ひて、集りてとくおろさんとて、綱を引きすぐして綱絶ゆる。卽ちやしまの鼎の上に、のけざまに落ち給へり。人々あさましがりて、寄りて抱へ奉れり。御目はしらめにて、伏し給へり。人々御口に水をすくひ入れ奉る。辛うじて、いき出で給へるに、また鼎の上より、手とり足とりしてさげおろし奉る。からうじて、御心地はいかゞおぼさるると問へば、息の下にて、ものは少し覺ゆれど、腰なむ動かれぬ。されど子安貝をふと握り持ちたれば、嬉しく覺ゆるなり。まづ脂燭さして來。此の貝顏みむと、御ぐしもたげて、御手をひろげ給へるに、燕のまりおける古糞を握り給へるなりけり。それを見給ひて、あなかひなのわざやと、宣ひけるよりぞ、思ふに違ふことをば、かひなしとはいひける。

竹取物語の參考書としては

小山儀　竹取物語抄
佐々木信綱　校註竹取物語
井上頼文　竹取物語講義
今泉定介　竹取物語講義

などがある。

竹取物語に次いでは、伊勢物語も、物語の一種ではあるが、既に前に記した通りのも

のであるから、こゝには述べない事とする。

これに次いで出た

大和物語　二卷（在原滋春）

も、その體裁は全く伊勢に倣うたもので、更に色彩が濃厚になつてゐる。このほか、

宇津保物語　二十卷
住吉物語　一卷
落窪物語　四卷
とりかへばや物語　四卷
堤中納言物語　一卷（藤原兼輔）
濱松中納言物語　五卷（菅原孝標女）
狹衣物語　八卷（大貳三位）

などもあるけれども、紫式部の源氏物語の右に出づるものはない。

十七、源氏物語

紫式部は、當時の碩學藤原爲時の女で、藤原宣孝に嫁し、一女賢子――世に大貳三位といふ――を擧げた。夫、宣孝の死後、一條天皇の中宮上東門院に仕へて、令名を一世に擧げた。

源氏物語、五十四帖。その結構は二段に分れて、前の四十四帖は、專ら源氏の君と紫の上とを骨子として、ほかに許多の人物と事變とを配合し、後の十帖は、源氏の子、薫大將と匂宮とを主人公として、これに大姫君、中君、浮舟の三女を配して描き出したものである。この終の十帖を「宇治十帖」と稱へる。

前の四十四帖は、全編を通じて幸福泰平の世態を寫し、後の十帖は主人公の運命に悲劇的な傾向が描かれて居る。が、源氏の君を中心とする幾多の人物の行動は、要するに平安城裡泰平を謳ひ風雅を盡して「ものゝあはれ」に世相を律したものである。この「ものゝあはれ」とは、まことに、平安朝の男女を通じて、世態の標準、處世の標的

としたものであつて、「ものゝあはれ」を解せざれば、全く紳士淑女の仲間入りが出來なかつたのである。江戸時代に、かの「粹」といふ一の標準が萬事を解決して、これを知らざるものは所謂「野暮」と蔑まれたのと、形こそ變れ、相似た點がある。

源氏物語の文章は、實に千古の國文學中匹敵するものを見ない程のもので、その流麗優美なる點、洗錬推敲を經た點、筆路整然として前後の照應當を得、用意の周到なる、しかも極めて自然的な修辭を以て景物を寫し、事を論ずるに、其の妙を究むる所、ほとほと感服せざるを得ないのである。今參考の爲に五十四帖の名を擧げて文例に移らう。

桐壺　箒木　空蟬　夕顔　若紫　末摘花　紅葉賀　花宴　葵　榊　花散里　須磨
明石　澪標　蓬生　關屋　繪合　松風　薄雲　槿　乙女　玉鬘　初音　胡蝶　螢
常夏　篝火　野分　行幸　藤袴　槇柱　梅枝　藤裏葉　若菜　柏木　橫笛　鈴虫
夕霧　御法　幻　雲隱　匂兵部卿　紅梅　竹河　（以下宇治十帖）　橋姫　椎本
總角　早蕨　寄生　東屋　浮舟　蜻蛉　手習　夢浮橋

石山寺に於て源氏物語起稿中の紫式部（國華に據る）

須磨の一節

須磨には、いとゞ心づくしの秋風に、海はすこし遠けれど、行平の中納言の、關ふきこゆるといひけむ浦波、夜々はげにいと近くきこえて、またなく哀なるものは、かゝるところの秋なりけり。御前にいと人ずくなにて、うち息みわたれるに一人目をさまして、枕を欹てゝ、四方の嵐をきゝたまふに浪たゞこゝもとにたち來る心持して、涙おつともおぼえぬに、枕うくばかりになりにけり。琴を少しかきならし給へるが、われながらいとすごうきこゆれば、ひきさしたまひて、

こひわびて　なく音にまがふ　浦浪は　思ふ方より　風やふくらむ

とうたひたまへるに、人々おどろきて、めでたう覺ゆるに、しのばれて、あいなう起きゐつゝ、洟をしのびやかにかみわたす。げにいかに思ふらむ、わが身一つにより、親はらから片時たちはなれがたく、程につけつゝ思ふらむ家を別れて、かく惑ひあへると、おぼすにいみじくて、いとかく思ひ沈むさまを、心細しと思ふらむと思せば、晝は何くれとたはぶれ言うちのたまひ紛らし、徒然なるまゝに、いろいろの紙をつぎつゝ、手習をしたまひ、珍らしき樣なる唐

の綾などに、樣々の繪どもをかきすさびたまへる、屏風のおもてどもなど、いとめでたく見ごころあり。人々の語りきこえし海山の有樣を、遙かにおぼしやりしを、御目に近くては、げに及ばぬ磯のたゝずまひ、二なくかき集め給へり。このころの上手にすめる千枝、常則などをめして、作繪（つくりゑ）つかうまつらせばやと、心もとながりあへり。なつかしうめでたき御有樣に、世の物おもひ忘れて、近うなれつかうまつるをうれしきことにて、四五人ばかりぞ、つと侍ひける。前栽の花いろいろさき亂れ、おもしろき夕暮に、海みやらるゝ廊に出でたまひて、佇みたまふ御樣の、ゆゝしう清らなること、所がらはましてこの世のものとも見えたまはず。白き綾のなよゝかなる、紫苑色など奉りてこまやかなる御直衣、帶しどけなく、うち亂れたまへる御樣にて、釋迦牟尼佛弟子となのりてゆるゝかによみたまへる、また世にしらずきこゆ。沖より舟どものうたひののしりて漕ぎゆくなどもきこゆ、ほのかにたゞ小さき鳥のうかべるとも見やらるゝも、心細げなるに雁の列ねてなく聲、機の音にまがへるを、うちながめたまひて、御涙のこぼるゝを、かきはらひたまへる御手つき、黑木の御數珠にはえたまへるは……人々のこゝちなみ慰みにけり。

源氏物語の註釋書は古來數多くあるが

四辻善成　河海抄
一條兼良　花鳥餘情
西三條公條　細流抄
中院通勝　岷江入楚
北村季吟　湖月抄
釋　契沖　源註拾遺
賀茂眞淵　源氏物語新釋
本居宣長　紫氏物語玉の小櫛
萩原廣道　源氏物語評釋
佐々政一等　新譯源氏物語
池邊義象　源氏物語詳解
鎌田正憲

などはその主なものである。

十八、歌序

歌序には、歌集の序文と長短歌のはしがき――序――との二種がある。單に歌の序文としては既に萬葉集にも多く載せられてあるのであるが、然しそれらは、ほとんど漢文を以てせられて居るので、これは未だ國文の發達を見なかつた爲であるが、この時代は、おほよそ物語に見たと同系の純國文を以て、それが綴られて居る。貫之の「大堰川行幸和歌の序」も有名であるが、次に古今集のものを抄録して、その一例としよう。

やまと歌は、人の心を種として、よろづの言の葉とぞなれりける。世の中にある人、ことわざしげきものなれば、心に思ふ事を、見るもの聞くものにつけていひ出せるなり。花になく鶯、水にすむ蛙の聲をきけば、いきとしいけるもの、いづれか歌をよまざりける。力をも入れずして天地を動かし、目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ、男女の中をも和らげ、猛き武士の心をも慰むるは歌なり。この歌、天地の開けはじまりける時より出て來にけり。しかはあれども世に傳はる事は、ひさかたの天にしては、下照姫にはじまり、あらがねの地にしては、須佐之男命よりぞ起りける。ちはやぶる神代には歌の文字も定まらず、すなほにして、ことの心わきがたかりけらし。人の世となりて、すさのをの命よりぞ三十文字あまり一もじはよみける。かくてぞ花をめて、鶯をうらやみ、霞をあはれび、露をかなしぶ心詞多くさまざまになりにける。遠き所もいでたつ足もとより始めて年月をわたり、高き山も麓の塵土よりなりて天雲たなびくまでおひのぼれる如くに、この歌もかくの如くなるべし……いにしへよりかく傳はるうちにも、奈良の御時よりぞひろまりにける。かの御世や歌の心をしろしめしたりけむ、かの御時におほきみつのくらゐ柿本の人麿なむ歌のひじりなりける。これは君も人も身を合せたりといふなるべし。秋の夕、龍田川に流るゝ紅葉をば、みかごの御目には錦と見たまひ、春のあした吉野山の櫻は、人麿が心には雲かとのみなむ覺えける。又山のべの赤人といふ人ありけり。歌にあやしくたへなりけり。人麿は赤人が上に立たむ事かたく、赤人は人麿が下に立たむ事かたくなむありける。……これよりさきの歌を集めてなむ萬葉集となづけられたりける……

日記には

蜻蛉日記　三卷　右大將道綱母
紫式部日記　一卷　紫式部
和泉式部日記　一卷　和泉式部
讃岐典侍日記　二卷　讃岐典侍

紀行には

土佐日記　一卷　紀貫之
更科日記　一卷　菅原孝標女

がある。文體は物語のやうに艶麗な所はなく、歴史の如く謹嚴な所もないが、日常の事象と行旅の感想とを叙述して、卒直な中に一種の妙味を含んで居るのはその特長である。

(一)土佐日記　は、貫之が延長八年に土佐守となつて赴任し、その地に五箇年を送つた後承平四年に任滿ちて、京に還る時の航路の紀行文であつて、純粹な國文として、その文學的價値はむしろ和歌集の序よりも優位にある。行文に何等の虚飾なく、任地土佐に失つた亡兒の追懐は全篇を通じて見ゆる所であるが、風波につけて海賊の難を思ひ、徒然のあまりに滑稽を弄するあたり、輕快にして而も莊重の意を失はざる所は、流石に名家貫之の筆で、よく凡手の及ぶ所でないと思はれる。

これより今はこぎはなれてゆく、之を見送らんとてぞ、この人ども、おひきける。かくてこぎ行くまにまに、海のほとりに留る人も遠くなりぬ。舟の人も見えずなりぬ。岸にもいふ事あるべし。舟にも思ふことあれどかひなし。かゝれば此の歌をひとりごとにしてやみぬ。

おもひやる　心は海を　わたれども　ふみしなければ　しらずやあるらむ

かくて、字多の松原をゆきすぐ。その松のかずいくそばく、いく千年へたりとしらず。もとごとに浪うちよせ、枝ごとに鶴とびかふ。おもしろしと見るに堪へずして、舟人のよめるうた。

みわたせば　まつのうれごとに　すむつるは　ちよのごちとぞ　おもふべらなる

こや。此の歌は處を見るにえまさらす。かくあるを見つゝ、こぎゆくまにまに、山も海も皆くれ夜ふけて東西も見えずして、てけの事、機取の心に任せつ。男も習はねば、いこも心細し。まして女は舟そこに頭をつきあてゝ、音をのみぞなく。……

廿一日、卯の時ばかりに舟出す。みな人々の舟いづ。之を見れば、春の海に秋の木の葉しもちる樣にぞありける。おぼろげの願によりてにやあらん、風もふかず、よき日いできてこぎゆく。この間に使はれんとてつきてくる童あり。それが歌うたふ「猶こそ國のかたはみやらるれ。わが父母ありとしおもへば、かへらや」とうたふぞあはれなる。

註釋書には

岸本由豆流　土佐日記考證
富士谷御杖　土佐日記燈
橘守部　土佐日記船の直路
香川景樹　土佐日記創見
今泉定介　土佐日記講義

豐田八十代　土佐日記新釋

などがある。

(二)紫式部日記　紫式部が、上東門院に宮仕した頃の記錄で、中宮御懷姙の頃から、後一條天皇及後朱雀天皇の御誕生、その他宮中生活の狀態が記されてある。

秋のけはひの立つまゝに、土御門殿の有樣、いはんかたなくをかし、池のわたりの梢ども、遣水のほとりの叢、おのがじし色つき渡りつゝ、大方の空も艶なるにもてはやされて、不斷の御讀經の聲々あはれまされり。やうやう涼しき風のけしきにも、例の絶えせぬ水の音なひ、夜もすがら聞きまがはさる。御前にも近うさぶらふ人々、はかなき物語するを聞しめしつゝ、惱しうおはしますべかんめるを、さりげなくもて隱させ給へり。御ありさまなどの、いと更なることなれど、うき世のなぐさめには、かゝる御前をこそ尋ねまゐるべかりけれど、現心(うつつ・ところ)をば引きたがへ、たとしへなく萬忘るゝにも、かつはあやしき。

參考書として

壺井義知　紫式部日記傍註

清水宣昭　紫式部日記釋
足立稻直　紫式部日記解
長田致孝　紫式部日記講義

などがある。

(三)更科日記　は菅原孝標の女の作、幼少の頃上總介となつて任に赴く父に伴はれて東國に下り、その任解けて共に都に歸る時――作者が十三歳の時――から筆を起し、五十歳で夫橘俊通に別れて悲歎に沈む時までの日記で、その初の部分は紀行、後の部分は自傳である。孝標の女は一面には自我の强いところもあつたやうに見えるが、その筆は頗るつゝましやかで、幼時から昔物語に心を入れ、源氏を耽讀して浮舟を憧憬した事や、文中夢の話の多いことなど、筆者の幻想的な心情を窺ふことが出來る。

更科日記は古來文章の順序が混亂して正しく讀むことが出來なかつたが、近時古寫本の發見によつてこの錯簡もほゞ明らかにせられた。

まだ曉より足柄をこゆ。まいて山の中のおそろしげなる事いはむかたなし。雲は足の下にふまる。山のなからばかりの、木の下の、わづかなるに、葵のたゞ三筋ばかりあるを、世はなれてかゝる山中にしも生ひけむよと、人々あはれがる。水はその山に三處ぞ流れたる。からうじて越えいでて、關山にゝゞまりぬ。これよりは駿河なり。よこはしりの關の傍に、岩壺といふ處あり。えもいはず大きなる石の四方なる中に、穴のあきたる中より出づる水の清くつめたき事かぎりなし。富士の山は此の國なり。わが生ひ出でし國にては西面に見えし山なり。その山のさま、いと世に見えぬさまなり。さまことなる山の姿の、紺青をぬりたるやうなるに、雪の消ゆる世もなくつもりたれば、色こききぬに、白き袙着たらむやうに見えて、山のいたゞきの少し平ぎたるより、煙は立ちのぼる。夕暮は火の燃えたつも見ゆ。清見が關は、かたつ方は海なるに、關屋ごもあまたありて、海までくきぬきしたり。けふりあふにやあらむ。きよみがせきの浪もたかくなりぬべし。おもしろき事かぎりなし。田子の浦は浪たかくて舟にて漕ぎめぐる。

參考書には

佐々木信綱　校註更科日記

第四章　平安朝時代

關根正直　更科日記略解
須田正雄　新譯更科日記
玉井幸助　更級日記錯簡考
玉井幸助　更級日記新註

二十、隨筆—枕草子

見聞に從ひ事に感ずるまゝを、折に隨つて、書きすゝめる所謂隨筆なるものも、また、此の時代に特に生れたもので、而も清少納言の枕の草子は、筆法頗る鋭利、後人の模倣を許さないものがある。清少納言は、歌人清原元輔の女で、元輔が少納言であつた爲に、その姓と官位とをとつて、かく呼んだのであらう。一條天皇の皇后定子の君に仕へて居たから、一方中宮の上東門院に仕へた紫式部と相對して、兩才媛が宮中に筆の戰を合はせた所は、實に花合戰、雪合戰ともいふべきものであつた。然し、式部が謹慎内に蓄へておもむろに出すといふ風に反して、納言は才氣煥發、相手を得るにまかせて、卽座に之を品評し罵倒し、寧ろ才能に誇るといふ傾向さへもあつた。一は婦人の德を具へて高風に生き、一は寧ろ男まさりの氣性を以て男子を瞠若たらしめるを痛快事とした風が見える。けれども、納言の才學は、實に敬服に價するもので、天性また敏捷活潑、枕の草子一篇を通じて、いかにも齒ぎれのよい、きびきびした所に、引きつけられる。

或は公卿宮媛のふるまひを評し、或は四季の光景を叙し、奇拔な觀察を以て、鋭い筆端に載せ來る所には、著者の面目が躍如として窺はれる。而もその文をやる事、特に簡潔で、所謂「體言どめ」の法を多く用ゐた所は、流石に清少でなければ出來ない所であらう。

四　季

春は曙。やうやう白くなりゆく山際すこしあかりて、紫だちたる雲の細くたなびきたる。夏は夜。月の頃は更なり、闇もなほ螢飛びちがひたる、雨などの降るさへをかし。秋は夕暮。夕日は

なやかにさして、山の端いと近くなりたるに、烏のねどころへ行くとて、三つ四つ二つなど飛びゆくさへあはれなり。まいて、雁などのつらねたるが、いとちひさく見ゆる、いとをかし。日入りはてゝ、風のおと、蟲のねなど、いとあはれなり。冬は雪の降りたるは言ふべきにもあらず。霜などのいと白く、又さらでもいと寒き、火など急ぎおこして、炭もてわたるも、いとつきづきし。晝になりて、ぬるくゆるびもてゆけば、炭びつ、火をけの火も、白き灰がちになりぬるはわろし。

鳥　は

こと所の物なれど、鸚鵡いとあはれなり。人のいふらん事をまねぶらんよ。郭公。水鷄。鳴。みこ鳥。鶯。ひたき。山鳥は友を戀ひて鳴くに、鏡を見せたれば、なぐさむらん、いとあはれなり。谷へだてたるほどなど、いと心苦し。鶴はこちたきさまなれども、なく聲雲井まできこゆらん。いとめでたし。頭赤き雀。いかるがのを鳥。たくみ鳥。鷺はいと見る目も見苦し。眼ゐなども、うたて、よろづに、なつかしからねど、ゆるぎの森に獨りはねじと爭ふらんこそをかしけれ。はこどり。水鳥は鴛鴦いとあはれなり。かたみにゐかはりて、羽根の上の霜を拂ふらんなどいとをかし。都鳥、川千鳥は友まどはすらんこそ。雁の聲は遠くきこえたるあはれなり。鴨は羽根の霜打拂ふらんと思ふにをかし。鷺はふみなどにも、めでたきものに作り、聲よりはじめて、樣かたちも、さばかりあてに、うつくしきほどよりは、九重のうちに鳴かぬぞいとわろき。……

参考書としては

加藤盤齋　枕草子抄（萬歳抄）
北村季吟　枕草子春曙抄
松平　靜　枕草子詳解
水井一孝　枕草子新釋
窪田空穗　枕草子評釋
金子元臣　枕草子評釋
武藤元信　枕草子通釋
栗原武一郎　枕草子全釋

などがある。

二十一、雜史

こゝに雜史といふのは、

榮華物語　大鏡　水鏡　今鏡　今昔物語　宇治拾遺物語

などである。大鏡は、史記の體裁に倣うて書かれたもので、その純粹な國文は筆路頗る勁拔、記事もまた繁簡よろしきを得て居る。榮華物語も、ほとんど同時に生れたものであるが、大鏡に比ぶれば何となく冗漫の點が多い。兩書ともに、藤原氏の榮華を寫し、關白道長を中心として、その周圍を微細に描き出した點は同樣であるが、榮華物語の徒らに道長の權勢を謳歌して居るに對して、大鏡は幾分批判的な態度を以て叙してある所に相違がある。もとより空想を交へない歷史物語で、この兩書は共に「世繼物語」の別名がある通り、代々の出來事をつぎつぎに書き進んだもので、「世繼」といふ名詞は、當時、今日の「歷史」といふほどの意味に用ゐられて居たものであらうと思はれる。古事記はしばらく措き、日本書紀以來の國史は、皆漢文を以て記すのが、本體となつて居たが、國文流行のこの期に至つて、こゝにはじめて國文體の歷史を得た事は、これまた物語の場合に見たと同樣、平安朝文學上の一特長である。

(一)榮華物語　は宇多天皇の寬平年中からはじめて、村上天皇以後の事を錄し、堀河天皇の寬治六年に至る二百餘年間の記錄である。卷數凡て四十帖。一帖每に風雅な卷名を附してあることは源氏物語のそれと等しく、作者は赤染衞門と稱して居るが、分明ではない。

(二)大鏡　は後一條天皇の萬壽三年、雲林院の菩提講で、百五十歲になる大宅世繼といふ人と、百四十歲になる夏山茂樹といふ人とが、相會うた事に筆を起し、兩人の談話に事よせて、文德天皇の嘉祥三年から萬壽三年まで百七十六年間の事蹟を記したものである。中に帝王の本紀と大臣の列傳とを分つた所は、曩に述べた史記の體裁に倣ふ所があつたといふわけである。作者は藤原爲業といふ說があるが、これも明らかでない。

(三)水鏡　は神武天皇から仁明天皇まで、歴代の變遷を説いたもので、卽ち大鏡以前のわが國文歴史である。

(四)今鏡　――一名續世繼、又、小鏡――これは一條天皇から高倉天皇の朝までを記載してある。水鏡は大鏡に、今鏡は榮華にその體を倣うた迹が見える。

(五)今昔物語　――一名、宇治大納言物語――は以上の諸書とは、全く體裁を異にして日本、支那、印度にわたつて種々の傳説を隨筆的に書き集めたものである。であるから中には、怪談虛説めいたものも多く、傳説物語といふべきであるが、ともかくも當時の歴史の一部も載せられてあるから、雜史としてこゝに掲げた。

卷數は三十一卷、內三卷は今闕けてゐる。作者は宇治大納言源隆國と云はれ、傳によれば、隆國が宇治に住み、往來の者を呼び入れて昔物語をさせ、これを書き記したものであると云ふ。「今昔」といふ名は各説話のはじめが、今は昔といふにはじまつてゐる所から稱したものである。

(六)宇治拾遺物語　は、今昔物語に洩れた逸事などを拾ひ集めたもので、體裁も文章もすべて今昔物語と同じく、全く「今昔」の補遺といふべきものである。兩書ともに斷片的な面白い話に滿ちて居り、殊に國史ばかりでなく支那・印度などに關するものは、また注意すべきであらう。

これら歴史ものゝ文體に就いては、特にこゝに文例を掲げる程の事はないと思ふ。何れも前に出した物語風の文章と同じである。

以上の諸書の參考書としては

榮華物語には　和田英松　佐藤球　榮華物語詳解

與謝野晶子　新譯榮華物語

大鏡には　大石千引　大鏡短觀抄

鈴木弘恭　校正大鏡註釋
落合直文　大鏡詳解
池邊義象　口譯大鏡
芳賀矢一　大鏡全釋
山內二郎
水鏡には
大石千引　水鏡短觀抄
江見清風　水鏡詳解
今鏡には
關根正直　今鏡證註
今昔物語には
岡本保孝　今昔物語出典攷
芳賀矢一　攷證今昔物語集
坂井衡平　今昔物語の新研究
宇治拾遺には
小島茂之　宇治拾遺物語私註
三輪彥根
三木五百枝　宇治拾遺物語註釋

などがある。

これを以て、平安朝の文學を概觀した事とするが、なほ詳細に亘つては、論ずべきものが多いのである。但し、その代表的のものに就いては、ほゞ一わたりして來た。

要するに、此の時代は、文學――國文學――の上には花々しい光を發した期間で、わが國文學史上、此の時代と、後の德川時代とは、まさに兩々相對した空想――藝術的――の時代である。これは、また現實に卽せず理想の光明に奔せた時代ともいはれよう。徒らに過去を追懷してその光榮を顧みた時代とは內容に於て異るものがあり、藝術的の產物は、現在に屈托する時からは、餘り多くを產しないものである。平安朝の文學は、同じ情緒の動いた德川時代に、最も多く研究せられたから、以上の各文學を今日了解せうとするには、勢ひ德川期の學者の研究によらなければならぬ。

たゞ此の平安朝の文學全體を通じて、これを詳細に論評したものに、

藤岡作太郎　國文學全史　平安朝篇

がある。一層深くこの時代思潮を究めんとする人の爲には絶好の著述と信ずる。

第五章　鎌倉室町時代

一、時代の概觀

源頼朝が鎌倉に幕府を開いてから、家康が關ヶ原の一戰に、海内を統一するまで。此の間また世上の事件を中心にして、自ら區分せらるゝものがある。卽ち、――源平二氏の鬪爭――鎌倉幕府時代――南北朝――室町時代――戰國時代――を經て織田豐臣に終るまで、此の間凡そ四百五十年。恰も平安朝のそれと相似て居る。

此の時代は、いふまでもなく政治上混亂の時代であつて、武人のめざめた結果、これまで堂上公卿がともかくも保持してゐた社會を破壞して、しかもまだ、德川時代のやうに、整然たる武家制度が確立するには至らず、或は起ち或は破れ、泰平は須臾にして戰亂となる有樣は、政治史に見える所である。卽ちこれを概觀して、上下武事に專念した時代といふ事が出來よう。朝に兵を談じ、夕に劍を磨くといふその世の中に平和の世を裝飾すべき文藝の事が、どうして發達しよう。鎌倉殊に室町の世を指して文學の暗黑時代と稱するのは、あまりに過言であらうが、これをこの時代の前後の、平安と德川との二期に比べて見ると、その燦爛たる光彩には、到底及ぶべくもないのである。とはいへ、戰亂にはまた戰亂の文學が存するもので、世はたゞ武事一面を以ては、決して過ぎゆくべきものでなく、かの東山時代の美術が、わが美術史上に頭角をあらはし、その名遠く海外の諸國にまで知らるゝものを生んだと等しく、わが文學方面に於ても、此の時代に相當した戰記文の如きは、また他の時代に見る事の出來ない勇勁の調を、殘したものである。

こゝに最も注意すべき一事は、此の期に及んで佛敎の主義が一層甚しく民心に侵入

し、當時の上下に崇佛者の頗る多かつた事である。禪宗は、新に將來せられ、念佛宗日蓮宗は國内に新に興つた。明日をも知らぬ戰場の勇士と、その妻子とは、何物にかたよる所が無ければならなかつたのは當然であつて、これら新宗敎は、正に時代精神の要求によつて生れたものに外ならぬのである。卽ちいづれも直截簡明、當時の民心に適應したもので、この日本的の佛敎が人々の心に入り易かつたのも當然の事である。殊に此の期の文學に佛敎趣味の多く見える所以は、文事にうとい武人が、外交重要の事件に、また日常の生活に、漢文を心得典例に明らかであつた僧侶を用ゐて、所謂祕書役たらしめた爲でもある。内幕に參加した僧侶は、參謀となつて機密にも參したであらう、時に詩を賦し文を草して、武人の名譽心を滿足せしめた事もあらう。かくして文權は遂に此等僧侶の手に握られるに至つたのである。

であるから、厭世無常の主張は、上下に流布して、和歌を學ぶも、また佛道の奥旨に達する爲の手段であると說き、かの源氏物語さへ、これらの人々には、天台止觀の意を承述せんが爲に記されたもので、いづれも有がたき御法の手引であると見えたのである。たゞし平安朝に衰へた尙武の氣風は、此の時代に勃然として再び頭をもたげ、武を練り、刄を磨する、日本在來の精神は一世を風靡するに至つた。平安朝時代が文事偏重ならば、此の時代は正に武事偏重の世の中となつたのである。その武事が、文學を生んで、こゝに佛敎の無常觀が加はつたといふもの、これが鎌倉室町時代の文學の特長である。

その文體に至つては、當代何等の新機軸を出したほどのものはなく、寧ろ平安朝に具備した文法を破壞して、混雜を呈した感がある。たゞ漢語佛語が益〻多く用ゐられて、形容や句法が豐富になつた點は、注意すべきで、平安朝時代の文章に纖弱の傾向があるとすれば、これには剛健雄大の風があり、所謂和文——雅文——の體裁から、近世の和漢混淆の文に至る、その中間の文章が、卽ちこの時代のものである。

漢文學の方面は、前期に比して衰微した觀があるのは爭はれない。正確な漢文を經

る事が、難かしい事となつて、一種異樣な擬漢文體を生じたのは、鎌倉時代に出た

東鑑

を見ても、知る事が出來る。そのほか、

台記　玉海　明月記　山槐記　百練抄　貞永式目

などの日記或は法制に關するものも、すべて支那人には讀めない漢文を以て綴られて居る。室町時代に至つては、其衰微益〻甚しく、纔かに五山の僧侶等が、山門を出でざる範圍内のみで、漸くこれを維持したといふに過ぎない有樣であつた。

此の時代の文學の種類は

和歌　物語　雜史　日記　紀行

などがあるが、これらは全く在來の舊態を繼承して而も或ものは寧ろ墮落した傾向がある。たゞ、

隨筆

のみは、幾分その外形と内容とを新にしたものがあるが、特に新奇の内容を具へて、その色彩を明らかにしたものは勿論

戰記文

であつた。平家物語は、まさに他の期に得難い、國民詩である。

連歌

も此の期に流行したが、これは特に足利時代の遊戯文學で、文學的要素から論ずれば何程の事もないものである。たゞこゝに

謠曲　狂言

が生れて、此の期末に一道の光明を與へた感があり、更に最後に

お伽草子

が生れたのは、江戸の平民文學の萠芽と見るべきもので、清新革進の氣運がまさに動かんとする英氣を窺ひ得るのは愉快に堪へない。

これを要するに、有職故實の學が起つた點、和歌の道は全く形式に陷つて秘事を事とした點、他人の武勇をのみ談ずる點、何れも過去を追想して、それに憧憬し、これを模倣し、新奇な理想によつて方面を展開せしむるといふ氣風の尠かつた事は、否むべからざる事實である。

二、和　歌

後鳥羽天皇が和歌所を宮中に設けられて、斯道の興隆、奬勵につとめられてから、土御門、順德の二帝はもとより

藤原定家　藤原家隆　僧寂蓮　源實朝　僧慈鎭　式子內親王　一條爲定　二條爲明　宗良親王　頓阿

などの名手が續出して居る。しかし新進の氣風は殆ど全く和歌の上に及ばなかつたから、徒らに舊態を墨守するばかりで、前時代から引續いた勅撰集の續出は、この傾向をよく物語つて居る。今、こゝにその有樣を見よう。

新古今集（源通具、藤原有家、同定家、同家隆、源雅經）
新勅撰集（定家）
續後撰集（爲家）
續古今集（爲家、藤原基通等）
續拾遺集（藤原爲氏）
新後撰集（藤原爲世）
玉葉集（藤原爲兼）
續千載集（爲世）
續後拾遺集（藤原爲藤、同爲定）
風雅集（花園上皇）
新千載集（二條爲定）
新拾遺集（二條爲明）

新後拾遺集（二條爲遠、同爲重）

新續古今集（飛鳥井雅世）

これに古今集以後の後撰、拾遺、後拾遺、金葉、詞花、千載の七集を加へると、實に二十一集の多きに達し、これを總稱して二十一代集といふ。

かくの如き有樣で、勅撰歌集は相次いで編まれたが、たゞそれは當時になさねばならぬと信ぜられた形式の傳統が生んだもので、なかに、たゞ新奇の旗幟を飜して邁進した形の見ゆるもの、また新しき歌風の樹立せられたと思はるるものは最初に現れた「新古今集」のみであつて、それは究竟定家、家隆の詩想に歸するのである。勅撰の系統をはなれては、長明、實朝、頓阿、宗良親王などが名歌を殘した。

三、新古今集

土御門天皇の元久二年、後鳥羽上皇の院宣によつて定家等五人の手で撰進せられたもの、その體裁は全く古今集に倣うたものであるが、歌は主として當代歌人の詠にとり、後鳥羽院をはじめ、攝政良經、撰者たる定家、家隆、通具、雅經、有家、更に西行、慈圓、寂蓮、長明、式子內親王、宮內卿、などがその主なもので、古人の詠は頗る尠ない。

內容の着想と措辭の新奇とは、餘韻深い歌調の流麗と快活とを生んで、秋風落莫の感ある鎌倉文學の中に、楓の霜に色づいた有樣を現出して居る。一體古今集以來の歌は、概して主觀の勝つたものが多かつたのであつたが、平安朝の末期から客觀の歌があらはれはじめ、この新古今に至つて、それが大成せられた觀がある。新古今は主觀客觀をよく融合して、抒情と叙景との調和をはかり、主客錯交景情一致の文學を成したもので、特に、その叙景の歌に優れたものがあらはれたのは、新古今の特長といふべきであらう。

なほ形式の上では、前時代のものに比べて初句切、三句切、及び名詞止の歌が多く、又一方では本歌取の詠の多くなつてゐることも注意せねばならぬ。

参考書としては

本居宣長　美濃の家づと
石原正明　尾張廼家苞
鹽井正男　新古今集詳解
鴻巣盛廣　新古今集遠鏡
佐々木信綱　新古今集選釋

などがある。

四、定家　家隆

古今集の撰者に貫之と躬恆とがあつたやうに、新古今集では定家と家隆とがある。

(一)定家　は俊成の子、名門に人となつて、史傳に通じ、詩文を學び、兼ねて弓馬の術をよくしたといふから、多藝多能、行くとして可ならざるはなき才人であつた事が窺はれる。その詠は技巧を主にして彫琢に苦心をした跡歴々として見るべく、此の點に於ては西行、家隆と趣を異にしてゐるが、要するに新古今の歌調を代表するものと見る事が出來る。

定家はまた歌論に於ても一家の說を樹立し、

詠歌大概　雨中吟　顯註密勘　僻案抄

などの諸書を殘して居る。かういふことからも、特に後世から異常な尊崇を受けるやうになつたが、これらの點は、貫之によく似たところがある。その家集を「拾遺愚草」といふ。

春の夜の　夢のうきはし　とだえして　みねに分るゝ　よこ雲の空
見渡せば　花も紅葉も　なかりけり　浦の苫屋の、秋の夕ぐれ
大空は　梅のにほひに　霞みつゝ　くもりもはてぬ　春の夜の月
駒とめて　袖うちはらふ　かげもなし　佐野のわたりの　雪の夕ぐれ

(二)家隆　は壬生中納言光隆の子で、爲に「壬生二位」と稱せられた。若くして寂蓮の婿となつたが、後俊成の門に學んで奥秘を究めた。歌の體、素より新古今風の特色を具

備してはゐるが、しかし定家に比して率直で、不用意の裡に詠まれた趣を見ることが出來る。歌人としては寧ろ定家の上に立つべき人であつた。多吟の人で、生涯を通じてその詠實に六萬首と稱せられて居る。家集に「壬二歌集」がある。

かすみたつ　末の松山　ほのぼのと　浪にはなるゝ　よこぐもの空
志賀の浦や　遠ざかりゆく　浪間より　氷りていづる　有明の月
風そよぐ　ならの小川の　夕暮は　御祓ぞ夏の　しるしなりける
昨日だに　こはんと思ひし　津の國の　生田の杜に　秋は來にけり

五、師範家

定家の子爲家は歌人としては平板凡庸の資ながら、俊成、定家と、一代の巨匠によつて基礎の固められた跡を承けて、よくこれを守成した爲に、この頃からはその門に學んで秘傳を授けられなければ、歌人たるの資格なしとされるやうになつた。かくして歌道に師範家なるものが生ずるに至つた。

抑々、この門閥といふ事は、既に前期平安朝の末葉に始められた事であつて、藤原顯季が六條家といふを稱へ、子顯輔、孫清輔と三代相次いでその地盤を固め、歌壇に於ける一大勢力をなした事に起るのである。此の頃突如として一方に出現したのが俊成で、その歌才よく六條家を壓してこゝに二條家といふを創めるや、兩雄相對することゝなり、爾來兩家は事毎に爭論をつゞけて、各その門戸を張るにつとめた。

然るに六條家では早くも家門の衰微を來したが、二條家では俊成の後に定家の出づるあつて基礎愈々固く、全く歌壇を風靡するに至つたのである。

けれども爲家の死後は、その三子各々派を立てゝ分れ、長子爲氏は二條家を繼ぎ、次子爲教は京極家を興し、更に第三子爲相は冷泉家を興し、こゝに三家は鼎立の形をなして相反目した。しかもこの反目論爭が歌學歌論そのものであるならば、大いに論じ大いに議すべきであるが、遂には古今集の秘事「三鳥三木」などいふ事をいひ出して愚にもつかぬ祕傳呼ばはりをはじめ、この爭論はたゞに勅撰集の撰進のみならず、遂

には政治的の色彩を帶び、皇室との提携によつて更に一層の紛糾を見るに至つた。かくて、その結果は、歌風の生氣と向上とを失ひ、遂には歌壇の衰退墮落を招くやうになつたのである。

六、源實朝

當時比較的自由の天地に起つた歌人は、右大臣源實朝その人である。歌道の墮落といふ事は彼の活眼に映じたのであらう。形式の束縛と、歌詞の單なる流麗とは、彼の心に不滿を懷かしめた。卽ち萬葉の風調に憧がれて、詠じ出したその歌風は、群鷄中の一鶴ともいはうか。而もその人は頼朝の次子で、征夷大將軍に任ぜられ、建保七年正月、齡いまだ三十に滿たずして暗殺されたといふのであるから、いよいよ平凡の歌人でなかつた事を思はせられる。

實朝の歌集を「金槐集」といふ。

ものの ふの　矢なみつくろふ　小手の上に　霰たばしる　なすの篠原
山はさけ　海はあせなむ　世なりとも　君にふた心　われあらめやも
箱根路を　我越えくれば　伊豆の海や　沖の小島に　なみのよる見ゆ
歎きわび　世を背くべき　方しらず　吉野の奥も　住みうしといへり
大海の　磯もとゞろに　よる波の　われて碎けて　さけてちるかも
いとほしや　見るに涙も　とゞまらず　親もなき子の　母をたづぬる
時により　過ぐれば民の　なげきなり　八大龍王　あめやめたまへ

金槐集の註釋書としては

田中常憲　金槐和歌集註釋
佐々木信綱　鎌倉右大臣家集
飯塚朝子　金槐和歌集詳解
齋藤茂吉　金槐集私鈔

がある。

七、他の諸家

以上述べて來つたものゝ外に當代の歌人としては、後鳥羽上皇　攝政藤原良經　僧寂蓮　僧慈圓（また慈鎭ともいふ）鴨長明　式子內親王　宮內卿　後醍醐天皇　宗良親王　があるが、今作例によつてその一班を示さう。

後鳥羽上皇

見わたせば　山もと霞む　水無瀨川　ゆふべは秋と　なにおもひけん

藤原良經

人すまぬ　不破の關屋の　板びさし　荒れにし後は　たゞ秋の風

寂蓮法師

さびしさは　その色となしも　なかりけり　槇立つ山の　秋の夕暮

鴨長明

石川や　せみの小川の　淸ければ　月もながれを　尋ねてぞすむ

式子內親王

忘れめや　葵を草に　ひきむすぶ　假寢の野べの　露のあけぼの

宮內卿

うすく濃く　野邊のみどりの　若草に　あとまで見ゆる　雪のむらぎえ

後醍醐天皇

都だに　淋しかりしを　雲はれぬ　吉野のおくの　さみだれのころ

身にかへて　思ふことだにも　知らせばや　民の心の　治め難さを

宗良親王

君の爲　世の爲なにか　をしからむ　捨てゝかひある　いのちなりせば

慈鎭和尙（今樣）

春の彌生の　あけぼのに　四方の山邊を　見渡せば　花ざかりかも　白雲の　かゝらぬくまぞなかりける

花たちばなも　匂ふなり　軒のあやめも　かをるなり　夕暮さまの　五月雨に　やまほとゝぎす　名のりして

ハ、連歌

連歌は既に前期から、堂上の間に行はれて居たのであるが、一般に弄ばれるやうになつたのは鎌倉中期以後の事で建武二年の二條河原の落書に

事新しき風情なく、京鎌倉をこきまぜて、一坐揃はぬえせ連歌、點者にならぬ人ぞなき。

とあつたのを以てしてもその大凡は窺はれる。けれども、その連歌の道を興隆せしめて形式を整へたのは、二條良基の力であつて、「菟玖波集」といふ連歌集は、良基と救濟との撰で、勅撰に准ぜらるゝものとなつた。卽ち在來一場の遊戯文學であつた連歌は、こゝに位冠を著けたわけである。良基はまた「連歌新式追加」と「筑波問答」とを著して、その法則を定め、宗祇の「吾妻問答」「老のすさみ」、釋心敬の「老のくりごと」「さゞめごと」に至つて、斯の道は大成せられたのである。しかしながら、元來文學としては低級なもので、その內容は至つて貧弱、辭句の修飾のみに心し、何等新奇の傾向をも生じなかつたのは、蓋し時代と人との然らしむる所であらう。たゞこれが、次期の俳諧のよつて起る源となり、又文藝が次第に貴族の手を離れて一般民衆に移つてゆく過程となつて居る點、及び平安朝の沈滯した空氣を一掃して、主情的傾向を盛し、輕妙飄逸な趣味を生んで居る所にその生命がある。

文明十四年五月廿五日內裏にて百韵の連歌に

露散る風に匂ふ橘

たますだれ軒ばの月にまきあげて　前大納言敎秀
すみわびぬるか隱れがの秋
かりにさすいほりあらはに月入りて　後花園院御製
風の聲をささにのみや殘るらん
太山の月におつる朝露　三品親王堯胤
寢ざめいく夜のあらましの末
行月もたづね入らばや山の奥　權僧正日應
遙けき道の行方知らばや
あけぬまは大空めぐる夜半の月　藤原よしひて
野分の風の吹きやしくらん
山本の村雲しろき月落ちて　智藴法師
おなじわかれの曉の空
山のはを月に幾度うらむらん　藤原正種

大篇長詩に乏しい我が邦の歌謠に、もしもこの連歌が、一篇を通じて一貫した意味を持つものであつたならばと思はせるのであるが、これは句と句との連絡を以て滿足もし、それを技としたものであるから、後に此の句は獨立して發句の形となつたのである。

（新撰菟玖波集）

九、隨筆

この期の隨筆は、

方丈記　一卷　鴨長明
徒然草　二卷　兼好法師

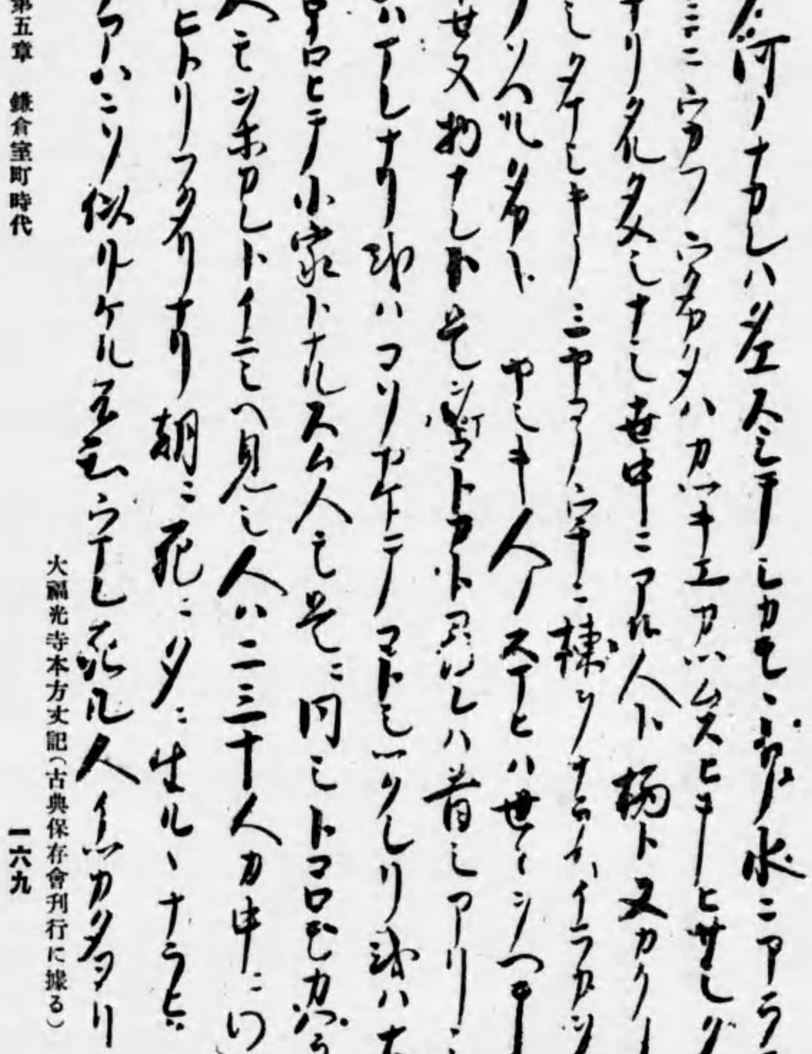
を以て代表せられるが、この外なほ、

發心集　八卷　鴨長明
撰集抄　九卷　西行法師

沙石集　十卷　無住法師

なども、この類に入れて差支ないものであらうが、こゝには專ら前の二書に就いて述べる事とする。

(一)方丈記　鴨長明は、下鴨社の禰宜長繼の子で俗名を菊太夫といつた。壯年の頃は、宮廷に奉仕して從五位下に叙せられたのであるが、源平の亂に退いて、山城加茂の社の氏人となつた。其の後、建仁元年に後鳥羽上皇に召されて和歌所の寄人となつたが、幾程もなく隱遁して名を蓮胤と改め、日野山に籠つて、藏する所は佛像のほかに僅かの書籍、琵琶ぐらゐであつた事が想像せらるゝ程、極めて簡易な生活に、風月を友とした人である。方丈記の最初に「行く川のながれは絶えずして、而ももとの水にあらず。よどみに浮ぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しくとゞまることなし。世の中にある人と住家と、又かくの如し」と書き出してある、それを見ても、無常觀――佛敎――から遂に厭世の主義を叙べたものである事がわからう。また、



大福光寺本方丈記（古典保存會刊行に據る）

其のあるじとすみかと、無常を爭ふさま、いはゞ朝がほの露にことならず。あるは露おちて花殘れり、殘るといへども朝日にかれぬ。あるは花はしぼみて露なほ消えず、消えずといへども夕を待つことなし。

など一々人生の無常を說いて居るが、章句の修飾頗る美に、熱情のこもつた筆致は、讀者をしてひしひしと身に迫らせらるゝものがある。安元の大火、治承の颶風、養和の饑饉、元曆の地震など、記中にあらはるゝ事項はまたみな長明がその社會を悲觀して、彌陀の光明に急がんとする心を促したもので、その一例としてこゝに方丈記の一部を揭げてみよう。

大かた此ところに住み初めしときは、あからさまと思ひしかど、今すでに五とせを經たり。假の菴もやゝふる屋となりて軒には朽葉ふかく、土居に苔むせり。おのづから事のたよりに都を聞けば、此山に籠り居て後、やんごとなき人のかくれたまへる數多くきこゆ。ましてその數ならぬたぐひ盡して是をしるべからず。たびたびの炎上にほろたびたる家、またいくそばくぞ。たゞかりの菴のみのごけくしておそれなし。ほどせばしといへども、夜ふす床あり。晝居る座あり。一身をやどすに不足なし。がうなは、小さき貝をこのむ。是よく身をしるによりてなり。みさごは荒磯に居る。則ち人を恐るゝが故なり。我またかくの如し。身をしり世をしれらば、ねがはずまじらはず。たゞ靜かなるを望とし、憂なきを榮とす。すべてよの人のすみかをつくるならひ、かならずしも身の爲にはせず。あるは妻子眷屬のためにつくり、或は親昵朋友のために作る。或は主君師匠および財寶馬牛のためにさへ之を作る。我今身のためにむすべり。人のために作らず。ゆゑいかんとなれば、今の世のならひ、此身のありさま、ともなふべき人もなく、たのむべきやつこもなし。たとひ廣くつくれりとも、誰をかやどし誰をかすゑん。それ人の友たるものは、富めるをたふとみ、ねんごろなるをさきとす。かならずしも情あると直なるとをば愛せず。たゞ絲竹花月を友とせんにはしかず。……命は天運にまかせて、をしまずいとはず。身をば浮雲になずらへて、たのまずまだしとせず。一期のたのしびは、うたゝねの枕の上に極まり、生涯の望は、をりをりの美景に殘れり。それ三界はたゞ心一つなり。心もしやすからずば、牛馬七珍もよしなく、宮殿樓閣も望なし。今さびしき住居、一間の菴、みづ

から是を愛す。……

註釋書には

加藤盤齋　方丈記淵說
橫島昭武　方丈記流水抄
佐々木信綱　校註方丈記
內海弘藏　方丈記詳釋

などがある。

(二)徒然草　兼好法師は卜部氏で、其の家は世々神道を以て朝廷に仕へたのである。吉田の地に住んだ所から吉田兼好ともいはれる。伏見・後伏見の兩朝に、宮中の瀧口に仕へ、後二條・花園天皇の時に六位藏人、左兵衞佐に任ぜられ、又後宇多院の仙洞にも仕へたのであつたが、感ずる所あつて僧となり、俗名をそのまゝ兼好法師と稱した。諸國を歷遊して世相を觀察したが、仁和寺の邊の雙ヶ岡といふ地に住んだ事もある。

徒然草は、前後の聯絡のない長文短篇二百四十ばかりから成つて居る。彼が修得した道佛主義を中心として更に老莊の虛無思想を交へ、よく社會の裏面を洞察し、その盾矛撞着の多い所を痛快に書いて居る。

徒然草抄、壽命院抄、上卷本文首端(神宮文庫)

蜻蛉のゆふべを待ち、夏の蟬の春秋を知らぬもあるぞかし。つくづくと一年を暮す程だにも、こよなうのどけしや。あかずをしと思はゞ、千年を過ぐすとも、一夜の夢の心地こそせめ。住みはてぬ世に、見にくき姿を待ちえて何かはせん。命長ければ恥多し。長くとも四十に足らぬほど

にて死なんこそ目安かるべけれ。其程過ぎぬれば、形を恥づる心もなく、人に出て交らはん事を思ひ、夕の陽に子孫を愛して、榮行く末を見んまでの命をあらまし、ひたすら世を貪る心のみ深くものゝ哀も知らずなり行くなんあさましき。

というて居るあたり、勿論佛教思想の厭世觀から來ては居るものゝ、長明に比すれば一層の皮肉を加へ、穿たざれば止まずの慨がある。

萬の事は、月見るにこそなぐさむものなれ。ある人の「月ばかりおもしろきものはあらじ」といひしに、又ひとり「露こそあはれなれ」とあらそひしこそをかしけれ。折にふれば、何かはあはれならざらん。月花は更なり。風のみこそ人に心はつくめれ。岩に碎けて清く流るゝ水のけしきこそ、時をも分かずめでたけれ。「沅湘日夜東に流れ去る。愁人の爲に住る事しばらくもせず」といへる詩を見侍りしこそあはれなりしか。嵇康も「山澤に遊びて魚鳥を見れば心たのしぶ」といへり。人遠く水草清き所にさまよひありきたるばかり、心なぐさむ事はあらじ。』名を聞くより、やがて面影はおしはからるゝ心地するを、見る時は、又かねて思ひつるまゝの顏したる人こそなけれ。昔物語を聞きても、このごろの人の家の、そこほどにてぞありけんと覺え、人も今見る人のうちにおもひよそへらるゝは、誰もかくおぼゆるにや。又いかなる折ぞ、只今人のいふ事も、目に見ゆるものも、我心の内もかゝる事のいつぞやありしがとおぼえて、いつとはおもひ出てねども、まさしくありし心地のするは、我ばかりかくおもふにや。

或は謹嚴、或は滑稽。まことに兼好法師その人の性格を語るもので、これらの他なほ有職故實を說き、和歌を論じ、戀愛を論じた文章もある。要するに、徒然草一篇を通じて見る所は、兼好が人生を達觀し時代を超越して、好む所に從つて生を送つたといふものゝ、一方にはなほ平安朝以來の感情主義を全く脫する事が出來なくて、所謂舊思想たる情緒主義と新思想たる厭世主義とが、並存し、融和し、反撥した點にあると思はれる。

徒然草は前期の枕の草子と並んで隨筆の双璧とせられてゐるが、その廣く行はれた事は遙かに枕の草子以上で、從つて註釋の如きも數十種に及んでゐる。

今その主なものを擧げて見ると

林羅山　徒然草野槌

北村季吟　徒然草文段抄
淺香久敬　徒然草諸抄大成
内海弘藏　徒然草詳解
沼波武夫　徒然草講話
青木佐野保太郎正　徒然草新釋
池邊義象等　合評徒然草
芳賀矢一　口譯徒然草
塚本哲三　徒然草解釋

十、物語　お伽草子

平安朝の物語風のものは、此の期に及んでも、惰性を以て、多少の產があつた。

苦の衣　五卷
鳴門中將物語　一卷
秋夜長物語　一卷
鳥部山物語　一卷
精進魚類物語　二卷
鵼鷺合戰物語　三卷

などが、それであるが、もとより平安朝の雄篇大作とは似もつかないもので、たゞ殘骸を見る心持がする。そのほか、

義經記　八卷
曾我物語　十卷（十二卷）

といふものもある。これは、物語風といふよりも、寧ろ戰記文に近いものであつて、史上の材料、英雄の傳記を骨子として、それが文學的に綴られたものである。「義經記」は源義朝の都落に筆を起して、義經の一代を叙し、「曾我物語」は曾我兄弟が父の仇工藤祐經を討果した快事を、叙述したものである。物語の内容からこれを見れば、